

2008
September

9 月

高校版

Volume

3

2 私を育てたあの時代、あの出会い

「読む」ことの意味に気づき、本当の授業を知った
静岡県立磐田南高校教諭◎**渥美 健**

4 特集

「自立する高校生」を
どう育てるのか

実践編——学校現場の事例から学ぶ

- 6 **学校事例①** 群馬県立前橋高校 主体的に学ぶ力を身に付けさせるために手をかける
- 10 **学校事例②** 鳥取県立倉吉東高校 人間教育を土台に「自立した学習者」の育成を目指す
- 14 **学校事例③** 広島県立安西高校 やすにし グループ学習での「学び合い」が主体的な学習へ導く
- 18 **対談** 「頑張る」ことを肯定する雰囲気が高校にはあった
——事例校の卒業生による対談

20 データで見る中学校

成績中・下位層で「そこそこ志向」が強まる

Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査(中学生版)」より

21 指導変革の軌跡

22 岐阜県立関高校

学力向上フロンティア事業の継承◎教師の負担削減と組織力の向上で「フロンティア精神」を次代へとつなげる

26 山形県立新庄北高校

3年間を見通した初期指導◎1年生からの年2回の効果検証が早めの軌道修正に結び付いた

30 奈良県・私立かし榎原学院高校

生徒と深くかかわるチューター制◎チューター教師と担任の連携で生徒の内面に深く切り込む

34 10代のための「学び」考

大村 智

北里研究所名誉理事長、日本学士院会員
好奇心のおもむくままに得た知識が研究者としての土台を築いた

36 未来をつくる大学の研究室

食品衛生学と薬学の融合

静岡県立大大学院生活健康科学研究科 食品栄養科学専攻

40 VIEW'S REPORT

韓国の高校英語教育の実態

「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」+韓国現地調査より

43 教える現場、育てる言葉

現場で学ぶ瞬間の判断力と創意工夫

盲人更生援護施設◎(財)アイメイト協会

46 生きたデータの見せ方・つくり方

2年生夏休み明けの意識付け

52 VIEW'S SQUARE



30代になっ
たばかりの年
に、私は浜松
南高校に赴任
しました。今から20年前です。

当時の浜松南高校は、生徒への補習の連絡を「僕の補習においてよお」と歌詞にして掲示板に貼り出すようなノリのよい先生がたくさんいました。私が配属された第2学年団も学年主任を中心にとてままとまっていて、学年主任と一体となって学年、そして学校を引っ張っていたのが寺田先生でした。寺田先生は私よりたった2年早く来ただけなのに、勤続10年以上と思えるほど、学校に馴染んでいました。年齢は私より9つも上なのですが、とても親しくしてもらって、私は生意気にも最初から「寺田さん」と呼んでいました。

当時、私は教壇に立って9年目。授業は普通にやっていたらそれなりに格好がつく。とはいえ若造の身。学校全体を見渡すような立場でもない……そんな気持ちで、1人のクラス担任、授業担当者として日々を過ごしていました。ところが、寺田先生に出会って、それが甘い考えだと気がつきました。年齢やキ

私を育てた あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

「読む」ことの 意味に気づき、 本当の授業を知った

静岡県立磐田南高校教諭 渥美 健 ATSUMI KEN

変化を求め、成長をしようとする思いは、だれの中にもある。

しかし、繰り返される日常に埋もれるように生きていくうちに、新しい自分への渴望を忘れてしまうことがある。

慣れや甘えに埋没しそうな自分を引き上げてくれたのは、

「本当の授業」を知る先輩教師だった――。

静岡県立磐田南高校の国語科・渥美健先生が体験した、
教師としての30代の目覚めをうかがった。



撮影◎静岡県立浜松南高校にて

右 てらだ・たつゆき 1986～94年度の9年間、浜松南高校に勤務。93、94年度進路指導主事を務める。浜松西高校を経て袋井高校へ。「遠州バサラの会」など、国語教育において幅広く活動している。

左 あつみ・けん 浜松南高校に12年間勤務したあと、磐田南高校へ。03年度より同校進路指導主事。同じく03年度より「静岡県内進路指導連絡会」の事務局を務め、現在6年目。

先輩教師の言葉

大切にしていた
信念を受け継いで
もらえた

静岡県立袋井高校教諭
TERADA TATSUYUKI 寺田達之



きちんと読ませるとい
ことは、生き
る力を付ける

ということですが。だから文字だけにこだわることありません。生活のすべてのシーンが国語の授業につながっていると私は思っています。

では、きちんと読むということを意識した授業とはどういう授業でしょうか。私は、「遠州バサラの会」などで出会う若い先生たちにも尋ねています。例えば、『徒然草』で「仁和寺にある法師」を読んだとき、なぜ「ある寺」ではなく「仁和寺」でなければならぬのか、そこにこだわった読みができていますか。「仁和寺」である理由を教師はわかっていますか。授業での配慮が足りなければ生徒はそこを気にせずに読んでしまう。仁和寺が文脈をつくらせていることを教えて初めて、生徒にしか

ヤリアを問わず、教師は目の前のことだけでなく学校全体のことで、そして生徒の丸ごと全部を考えないとだめなのだということをおぼわったのです。

何より国語に対する考えが変わりました。寺田先生は「文章をしつかり読もう」と言いました。我々が身に付けさせたい国語の力は、授業の内容を覚えて、定期テストで点数を取る力ではない。初めて見た文章を自分の力で読み取る力だ、と。確かにそれまでの私は、定期テストはできて模試になると点数が取れない生徒をどう指導すればよいか、答えを見つけないことができていませんでした。生徒の中には「国語は勉強をしても学力は伸びない」と諦めている者もいました。今思えば当然です。それまでの私の授業は、教科書や指導書に頼ったもので、生徒に考えさせるものではなかったのですから。寺田先生と出会ってから、文章を通して人間を読み、考えるという、いわば生きるために必要な力を養う時間が、国語の授業だと考えるようになったのです。



授業では、教科書や文法書を使わず、代わりに寺田先生のも

とで作ったプリントを配りましようにすべてワープロで打ち直し、先入観なしでしっかりと読ませるため余計な注釈などを除いたものです。文法は、言葉がどういう原理で使われるか、事例を通して説明するオリジナル教材を開発し、授業で使いました。私が作ったプリントを寺田先生に見せたところ「こんな文字がぎゅうぎゅう詰めのプリントなんか、生徒は読みたくな

の先生は、今でも当時のプリントを大切に保管しています。

定期テストでも応用問題を出題しました。例えば、『徒然草』なら授業とは別の章段を出題するわけです。授業でもテストでも、とにかく生徒に考えさせたのです。1年生の時から一緒に鍛えた学年は、記述模試で県で2番の成績になりました。生徒も手応えを感じていました。文章に向き合う機会を与えれば、こんなに読めるのか……本当に驚きでした。でも、生徒の秘めた力を知った今は、驚きではありません。実際、今は漢文も白文で読ませます。事前に漢文の構造や用語法を徹底し、後はその授業の中で10分ほど読み

には教えている私が「こんなに読めるのか!」と驚くほどです。もちろん、生徒も私も読めないときがたまにあります。そのときは「では教科書を見てみよう」となるわけです。



一緒に働いた7年間、寺田先生には多くのことを教わりました。私は、先生の考えや技術を若い世代に伝えたいと思うようになり、2004年に国語研究会「遠州バサラの会」を結成したのです。県内外から若い先生が約30人参加し、模擬授業などを通して寺田先生から学んでいます。指導書を嚆呑みにせず自分の力で読もう、と寺田先生はあのころと同じように若い先生に語りかけています。寺田先生は、「これでよいはずだ」と、みんなが思い込んでいたことを問い直し、根底から覆すことができる力を持った人です。そんな先生との出会いのおかげで私は、50歳を迎えた今も、「自分の授業、自分の読みか?」と日々考え、自分なりに工夫を続けながら授業をしています。

り読ませたといえるのです。だから教師には、文章から時代や人間などを読み取るだけでなく、生徒がどう読むかを見通して、文章と生徒とのギャップを埋めていくことが求められます。

渥美さんには、「教師は、授業中の言葉で生徒を動かす」という私の信念を受け継いでもらえました。そしてもう一つ、教育におけるユーモアの大切さも渥美さんはわかってくれました。授業中、みんなが笑ったときに自分だけ笑えない……生徒にとつてこんなに寂しいことはありません。知的感動と結び付いた授業中のユーモアが、叱られても恥をかかれても勉強しない生徒を変える。そのことを知って、そして実践できる能力を渥美さんは持っています。



渥美さんの発案によって「遠州バサラの会」は結成されましたが、私がこの申し出を受けたのは、教師が授業の悩みを共有し、成長できる場所をつくりたかったからです。会の模擬授業では、お互いの授業を見てよいところ悪いところも素直に話し合うようにしています。よい教師は、授業が大好きで、そしていつも授業のことを考えています。優秀な教師を孤立させないということも、今の私の大切な役割だと思っています。

特集

「自立する高校生を どう育てるのか」

実践編

● 学校現場の事例から学ぶ

前号(6月号)の「実態編」では、

自立に向かいにくい高校生の意識や実態を

調査データと教師の声によって整理した。

では、実際に高校現場では、生徒を自立に向かわせるために
どのような実践を行っているのだろうか。

今号は、3校の事例を紹介する。

群馬県立前橋高校
主体的に学ぶ力を身に付けさせる

P. 6

鳥取県立倉吉東高校
人間教育を土台に「自立した学習者」を育成

P. 10

広島県立安西高校
グループ学習で主体的な学習に導く

P. 14

◎昨年度から、1年生の入学時に特に手をかけ、ソフトランディングしながら手を離していったらどうかという議論をしています。感覚的な表現ですが、**1年生で7割、2年生で5割、3年生で3割の手のかけ方**としています。(秋田県)

◎学習活動では、高2の2学期までは手をかけ、高2の3学期から徐々に手を離していくようにしている。ただ、生活状況の改善、学習の習慣化、意識の継続は大きなテーマである。**進路指導をきちんと**

と行うためには、面談指導には手をかけ続けるべき。生徒の気持ちや途切れさせないためにも重要だ。(佐賀県)

◎**生徒が皆、一度に手が離れるわけではない**ので、意識的に主体的な学習活動を促す機会を設けている。2年生の修学旅行後、2年生2

～3月の「3年0学期」、部活動引退後、文化祭終了後(7月)などだ。全体(学年)集会、個人面談、授業など、学年団で連携しながら生徒に働きかけている。(長野県)

◎基本的に2年生の9月以降、成績上位者には最低限の課題(基礎内容)のみを与え、自立した学習をし向ける必要がある。特に成績上位者に対しては、微に入り細にわたる指導から手を離す必要がある。**教師が手をかけるべき活動は面談**と考える。(長崎県)

◎行事でも、学習でも、**生徒が自ら「段取り」ができるようになるまでは手をかけて**います。目標達成までのプロセスを、きちんと考えて構築できるようになると、生徒自身で道筋を立てられるようになるので、あとは自分の力で頑張らせます。**他人とは違う、自分だけのやり方を見つけさせる。**実行するのは本人ですから。(奈良県)

◎生徒に手をかけるのは、1年生の入学してすぐの時期と、2年生の秋から冬、3年生の秋です。

1年生「中学生から高校生にする」、2年生「本格的に卒業後の生き方を考えさせる」、3年生「不安に付き合う」がテーマです。とにかく1対1で生徒の話を聞かない。偏差値や保護者の考えなどで、気持ちをごまかさない。教師が真剣に耳を傾けることによって、生徒が成長する時期はあるのです。(福島県)

◎生徒の学習習慣やモチベーションにかかわる指導は、ある時期からは手を離すべきなのかもしれません。しかし、ここに手をかけてこそ、教師と生徒の熱い信頼関係が生まれると思います。「いつまで手をかけるのか、いつ手を離すのか」という発想よりも、**「手をかけつつ自立させること」**あるいは**「自立させるための手のかけ方」**を模索していくべきだと思います。(滋賀県)

教師が語る 手をかけるべき指導、 手を離すべき指導 とは何か

教師が生徒の自立を感じる瞬間

- ◎1年生の朝の10分間学習で、最初は教師に言われないと何もできなかったのに、教師が教室にいても、静かに始めているのを見たとき、自立の一步を感じた。(静岡県)
- ◎無駄な質問が減ったり、質問のレベルが上がってきたりしたとき。本当に必要な質問だけができるようになったとき、生徒の成長を感じる。(兵庫県)
- ◎思うような結果が出なくても、まわりの人や社会、環境などに原因を求めず、自己を見つめる態度をとったとき。(三重県)
- ◎表面的にしつかりした自己主張よりも、例えば学習法での工夫など、内省的な成長が感じられることの方が、本当の自立を感じる。(埼玉県)
- ◎自分の志望校の過去問題をコピーし、黙々と解いている姿やその目付き。自分なりに学習法を工夫しながら学習していると知ったとき。(長崎県)
- ◎ほかの生徒に教える場面を見たときや、後輩の指導にあたっている場面を目にしたとき。(兵庫県)
- ◎3年生が受験を迎えた時期や受験を終えたときに、世話になった人たちに素直に「ありがとう」と言えるようになったとき。それまで自分のことで頭がいっぱいで保護者に甘えて当たり散らしていたような生徒が、自分が受験できることや支え続けてもらったことに対して、感謝の意を言葉や態度で示すようになるのを見ると、大人になったなと思う。(滋賀県)

*上記、読者の声は、「VIEW21」高校版6月号読者アンケートより抜粋

主体的に学ぶ力を 身に付けさせるために 手をかける

前橋高校が、生徒の自主性に任せる指導から手をかける指導へと転換したのは15年前。旧制中学の流れを汲む伝統校として、自信と挫折をバネに進む生徒をどのように支えているのか。

教師一丸となって 生徒を支える体制へ転換

群馬県立前橋高校は、例年3桁近い旧帝大合格者が輩出する県下屈指の進学校である。旧制中学校の流れを汲む伝統校として、長きに渡り生徒の自主性を重んじる指導を身としてきた。

勉強は自分でするもの、教師が手取り足取り教えるのは邪道である――。そうした指導方針の象徴ともいえるのが、同校独自の「カット」と呼ば

れる制度だった。教師が出張などで学校を不在とするときは、その授業は休講になり、生徒は早く帰宅していたという。

指導方針を転換したのは、15年ほど前だ。他校との進学実績を比較する中で、生徒の力を伸ばしきれていないのではないかとという声が学校の内外で聞かれるようになったことが、その背景にある。確かに、当時の現役の大学合格率は30%台。難関の志望校には浪人して入れればよいという考えが強かった。

野村直正校長は、現在の指導方針

に変わった理由を次のように話す。

「生徒がやるべきことをする。これは、今も昔も変わらない本校の基本的なスタンスです。自学自習を基本として、足りないところを生徒自身が見つけ出し克服していくことは大切です。ただ、すべてを生徒に任せたのでは、学校全体の底上げにはつながりにくいという実情もありました。共通の指導方針の下、手をかけるべきところは手をかけ、教師が一丸となって生徒を支えていく体制を構築する必要があるという声が増しに強くなっていったのです」

生徒の変化と進路実績の 向上で、成果を実感

1992年に「カット」が廃止されたのは、そうした動きの先駆けだった。しかし、生徒の家庭学習に教師が踏み込むのは、かえって自立を妨げるとする意見も根強くあった。この十数年は、生徒の自主性を重んじる教師と、組織的な取り組みを重視する教師が合意を築き上げていく過程であったといえる。

同校は、学年主導で取り組みを進

PROFILE

群馬県立前橋高校

◎2008年に創立131周年を迎える伝統校。「質実剛健」「気宇雄大」を校訓として、文武両道を目指す。県下トップクラスの進学校でありながら、県の高校総体での総合成績は07年2位、08年3位と高い実績を収めている。

設立 1877(明治10)年

形態 全日制/普通科/男子

生徒数(1学年) 320名

08年度進路実績 国公立大には、北海道大11名、東北大39名、東京大13名、一橋大4名、京都大4名、大阪大5名などに230名が合格。私立大には慶應義塾大35名、明治大71名、早稲田大53名などに延べ752名が合格。

住所 〒371-0011 群馬県前橋市下沖町321-1

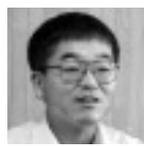
電話 027-232-1155

WEB PAGE <http://www.maebash-hs.gsn.ed.jp/>

めるところから始めた。学年単位で新しい取り組みを試行し、うまくいけば次の学年に引き継いでいく。あ



高橋康幸 Takahashi Yasuyuki
群馬県立前橋高校
教職歴25年。同校に赴任して12年目。3学年主任。「元氣な生徒を育てたい」



清水豊 Shimizu Yuuka
群馬県立前橋高校
教職歴22年。同校に赴任して6年目。2学年担任。「問題意識を持って、自分から学習する生徒にした」



丸山正 Maruyama Tadashi
群馬県立前橋高校
教職歴25年。同校に赴任して7年目。1学年主任。「人間力が高く、優しくて強い生徒を育てたい」



長岡正範 Nagaoka Masanori
群馬県立前橋高校
教職歴33年。同校に赴任して8年目。進路指導主事。「夢を持ち、その実現に向け努力できる生徒を育てたい」



水村達英 Mizumura Tatsuhiko
群馬県立前橋高校教頭
教職歴28年。同校に赴任して2年目。「校訓にある『質実剛健』『氣宇雄大』な生徒を育てたい」



野村直正 Nomura Naomasa
群馬県立前橋高校校長
教職歴35年。同校に赴任して3年目。「自ら考え、工夫し、課題を克服していく生徒を育てたい」

手をかける指導といっても、教師がすべて手取り足取り指導するわけではない。「学習は生徒の主體的な営みである以上、すべてを教師が仕切るわけにはいきませんし、すべきでもないと考えます。主体的に学ぶ

予習で得た自信が 主体的な学びを促す

「生徒の変化、進路実績の向上など、成果を目の当たりにすることで、手をかける必要性を、教師が実感するようになりました」と振り返る。現在、現役の大学合格率が9割を超えているのは、そうした積み重ねの結果だろう。

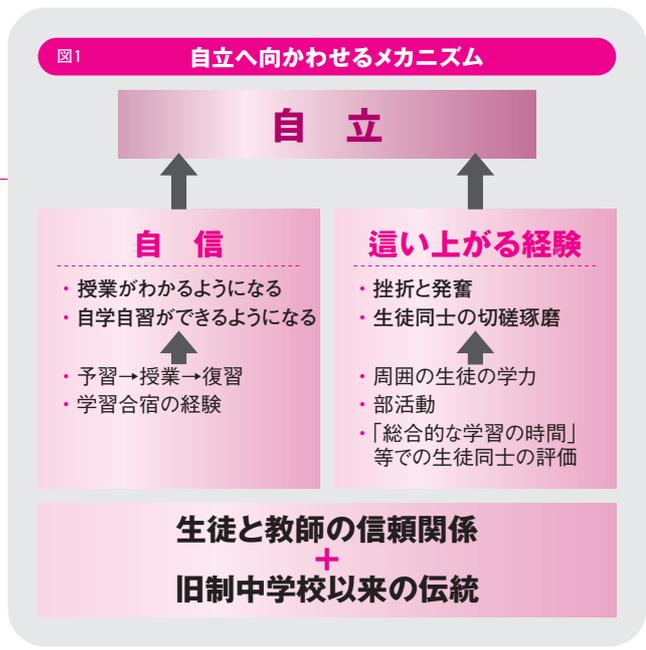
取組みは消え、別の取組みは学校全体で共有される、そうした淘汰が繰り返された。学習合宿や入学者オリエンテーション、受験前の添削指導など、現在行われている取組みの多くは、そうしたプロセスを経て徐々に定着していった。進路指導主事の長岡正範先生は、

状況を整えることこそが私たち教師の仕事です」と野村校長は強調する。「主体的に学ぶ力を身に付けさせるために、教師が手をかける」。これが基本的なスタンスだ。1年生4月の学習オリエンテーションでは、予習の仕方、辞書の引き方を教え、予習をして授業を受けるという流れを体験させる。最初の中間テストでは、生徒が確実に学校に適應できていくかどうか、結果を見ながら担任と教科担当とが話し

合い、問題があれば生徒と面談をして解決していく。入学時から手厚く指導する一方、授業は予習を前提として進む。「予習をすれば授業がわかる」。その自信が、生徒に授業に対する前向きな意識を持たせ、自立的な学習態度を培うと考えるからだ。例えば、早ければ1

年生から、予習で理解した内容と授業が異なっていたときには「僕の予習の仕方は間違っていますか」「違う解法を考えたのですが」と、自ら教師に疑問を投げかける生徒がいる。自学自習も、生徒の自信を育む好機と捉えている。特に夏休みに行う学習合宿では、1、2年生は5日間、3年生は6日間、それぞれ1日10時間30分、自習させる。教師からの指示は一切ない。生徒自身が課題を選

図1 自立へ向かわせるメカニズム



示は一切ない。生徒自身が課題を選

び、わからないことは待機している教師に質問する。

「自学によって身に付けた学力もさることながら、それ以上に重要なのは、自ら選んだ課題に10時間以上も取り組んだという自信です。それが受験に耐えられる強い心を育み、まわりの生徒と切磋琢磨する雰囲気を生み出すのです」と、長岡先生は指摘する。

教師同士の連携によって挫折から立ち直らせる

同校の生徒にとっては、挫折も立へ向けた第一歩になる。3学年主任の高橋康幸先生は、「中学時代は学年で1、2番の成績だった生徒が、本校に入学した途端に300番台になることもあります。その挫折を克服し、這い上がっていく経験を通して自立する生徒もいます」と話す。

同校は「総合的な学習の時間」に「知のフロンティア」(図2)というテーマ学習を行う。自分の興味・関心に沿ったテーマについて調査研究を行い、1年間の成果を論文にまと

める。友だちの優れた論文に接し、発奮する生徒も少なくない。

1学年主任の丸山正先生は、「『知のフロンティア』は、生徒の自主性に任されています。熱意を持って取り組むか、1年間ほとんど何もせず、最後に内容を適当にまとめて完成させるかは、生徒のやる気次第。大学生顔負けの級友の論文を見て、自分のふがいなさを痛感し、次年度の研究に向けて意欲を燃やす生徒もいます」と話す。

挫折から立ち直らせるには、教師同士の連携が欠かせない。学年団はもちろん、担任と部活顧問、教科担当、進路指導部らが情報を共有して生徒の状況を把握し、フォローするためのネットワークを張りめぐらす。悩んでいる生徒、つまづいている生徒がいれば、複数の教師が働きかけ、あるときは叱咤激励し、あるときは生徒と共に解決の方策を探る。

自分の言葉で語り始める、それが自立した瞬間

生徒が自立した瞬間を見逃さず、

適切にフォローすることも大切だ。2学年担任の清水豊先生は、「生徒の自立を感じるのは、生徒が自分

自身の言葉で語り始めたときです。私は地歴担当ですが、世界史の授業で生徒が『この時代のチベットは独

図2

知のフロンティア-学びの創造

前橋高校では、2003年度から「総合的な学習の時間」に「知のフロンティア」と呼ばれるテーマ学習を実施している。テーマは学年ごとに、1年生は「現代社会を見つめる」、2年生は「自己を見つめる」、3年生は「将来を見つめる」とし、それぞれ研究成果を論文にまとめる。個々のテーマは「ケータイ文化のゆくえ」「暮らしの中のエネルギー」「酸化チタンの光触媒」「ガンの告知と医師のあり方」など幅広い。生徒は、選んだテーマに応じて「政治学系」「情報工学系」「芸術系」などのゼミに参加し、近接するテーマを研究する

生徒と一緒に、ディベートや資料収集、研修旅行などによって研究していく。論文の量は、A4のレポート用紙2枚が必須だが、30枚以上の大作を書き上げる生徒もいる。「総合的な学習の時間」担当の清水先生は、「生徒は、教師の意見よりもほかの生徒の感想の方が気になるようです。友だちには負けたくない、評価されたいという気持ちが強いのでしょうか」と指摘する。この研究によって、大学の学部・学科を決める生徒も多い。

	1年生	2年生	3年生
テーマ	「現代社会を見つめる」 現代社会が抱えているさまざまな問題や課題を自ら選び、課題解決を図る	「自己を見つめる」 自己の興味関心・進路希望に応じた課題を設定し、生き方について考える	「将来を見つめる」 各教科で学んだ知識技能を総合学習と関連付け、将来の自己を考える
1学期	<ul style="list-style-type: none"> 総合ガイダンス ゼミテーマ講演会 ゼミ内での討論会 	<ul style="list-style-type: none"> 総合ガイダンス 研究テーマや計画の考察 研修先の選定 	<ul style="list-style-type: none"> 総合ガイダンス 論文演習 論文評価
2学期	<ul style="list-style-type: none"> 課題テーマについての調査研究 研修訪問先の研究 2泊研修旅行(企業研究所中心) 中間発表会 	<ul style="list-style-type: none"> 課題テーマについての調査研究 研修訪問先の研究 2泊研修旅行(大学中心) 大学教授による出張講義 中間発表 	<ul style="list-style-type: none"> 論文演習 論文評価 英語論文の作成 英語論文評価
3学期	<ul style="list-style-type: none"> 論文の作成 論文輪読会と相互評価 プレゼンテーション 	<ul style="list-style-type: none"> 論文の作成 論文輪読会と相互評価 プレゼンテーション 	

*前橋高校「2008年度キャリア教育・進路指導年間計画」より該当部分を抜粋し編集部で作成

立国家だったんですね」など、現代社会の諸問題と関連付けて考え始めたときは嬉しくなります。こうしたことの積み重ねによって、面接の場でもはつきりと将来の希望を述べられるようになっていくのです」と指摘する。

丸山先生は、「生徒が自分自身の生活を振り返り、生活スタイルを変えようと意識し始めたとき、自立に向けて一歩を踏み出していると思います。成績がなかなか上がらなかつた生徒が朝早く学校に来て勉強を始めたたり、予習をしても授業に追いつかない生徒が居残り学習をしたりする。目標に向けて何をすべきかが見えてきた生徒は、もう立派な大人になつていると言ってもよいのではないでしょうか」と話す。

生徒の変化を捉えたときの教師の対応はさまざまだ。

「人前で褒められることを喜ぶ生徒、かえって恥ずかしがる生徒など、気質はさまざまです。褒められれば自信を深める生徒には『君、変わったな』などと声をかけますが、黙って

見守る方が成長すると思ったときは静観しています」（高橋先生）

学校への信頼感醸成のため 授業の質を高める

こうした指導が効果を上げられるのも、生徒と教師が深い信頼関係で結ばれているからだろう。特に高校のスタート時である1年生の間に、生徒が学校に対する信頼感を持てるようにすることが大切だという。

「学校への信頼感を醸成するためにも最も重要なのは、授業の質です。生徒に本校の授業にしっかりとした手応えを感じてもらうためには、教師自身がまず教科の指導力を磨くことが必要なのです」（長岡先生）

授業の質を高めるためには、生徒の状態を的確に把握することも重要だ。そのため、担任を中心とした個人面談の機会を学期に最低1回は実施し、生徒個人の情報把握に努めている。生徒の心理的な状況を多くの教師の目で多面的に把握し、担任だ

けではなく学年団の共通理解の上で指導を行うようにしている。また、部活動では、顧問となった以上は、競技経験がなくてもできる限り練習に出る。

こうして築いた生徒と教師の深い絆が、生徒の自立をあと押ししている。「教師がしようとしていることを、生徒が素直に受け入れる雰囲気が出て着していると感じます。手厚い指導を通して、教師に対する生徒の信頼感が高まっているからではないでしょうか」と水村達英教頭は評価する。

同校には伝統という強みもある。手厚い指導に変わった今も、教師の意識の根底には、学習だけではなく課外活動や部活動、行事のすべてに全力を傾けさせるといふ、旧制中学校以来の全人教育の理想がある。

「地域の優秀な子どもを預かっていられる以上、進路志望を達成するだけではなく、高い人格を持って卒業してほしい。その思いを教師一人ひとりが共有しているところが本校の強みです」と、長岡先生は強調する。そうした伝統は、生徒の間にも脈々

と受け継がれている。

「生徒には、勉強ばかりしていたのでは仲間から評価されないという意識が強くあります。受験直前にもかかわらず、他校との定期戦の準備に汗を流す、部活動をしながら高い志望を実現する。そうした先輩の精神は、後輩にも着実に受け継がれています」（丸山先生）

水村教頭は「本校生徒の献血率の高さは県内屈指。社会貢献という意識と共に、勉強一辺倒ではないことを仲間アピールしたいという思いもあるのではないのでしょうか。そうした自信と誇りを持ち、生徒同士が刺激し合う校風を受け継いでいるのだと思います」と指摘する。

生徒と教師の信頼感と長い歴史が培った伝統の重みが、今の前橋高校を支えている。これらは一朝一夕に築き上げられたものではない。生徒に必要なことは何かを考えながら、教師が地道な努力を重ねる――。生徒を自立へと導く指導も、そうした過程の中で、一つずつ築き上げられたものなのである。

鳥取県立倉吉東高校

人間教育を土台に 「自立した学習者」の 育成を目指す

倉吉東高校が「自立した学習者」を育てるために教育の枠組み「倉吉東高のかたち」を策定したのは2001年度。それから7年経った今、変化する生徒の気質、学力に、同校ではどのように対応しているのだろうか。

「生意気さ」を 失った生徒たち

鳥取県立倉吉東高校は同県中部地区のトップ校として、毎年、2000人近くの国公立大合格者が輩出する伝統校。そんな同校も近年の生徒の変化は、指導上の課題の一つだ。純朴で素直。これは今も昔も変わらぬ同校の生徒のよさだが、近年の生徒には「よい意味での生意気さが欠ける」と、名越和範校長は指摘する。

「かつての生徒は、大人の言うこ

となんか聞いていられるか、というような背伸びをした気持ちを持っていたように思います。象徴的なのは生徒総会。以前は議長不信任を叩きつける生徒が多かったのですが、今は肅粛と信任票を投じるだけ。自分の考えを率直に他者につけることが苦手になっていると強く感じます」

そうした生徒の気質は授業風景にも反映されている。教師が意見を求めても、もじもじして答えられない生徒が増えた。かつての生徒には、何かを言おう、自分を表現しようともがく姿が見られたが、今の生徒は

すぐに「わかりません」とやりすごしてしまう。必然的に教師から問いかける機会は減り、一方的に知識や考え方を伝える授業に陥りがちだ。

加えて、近年は学力層の拡大も大きな課題だ。少子化という構造的な問題に加え、鳥取県では07年度に学区が撤廃された。

「かつては、学区内の上位10%程度の生徒しか入学していませんでしたが、近年は20%にまで広がっています。成績下位層の拡大はもちろん、上位層の中にも家庭学習の習慣や、もっと上を目指すという強い意志で

学習した経験がほとんどない生徒が増えました」（河田雅志教頭）

この課題解決には、入学定員を減らすか、入学した生徒をこれまでと同じレベルまで引き上げるかのどちらかしかない。同校は後者を選んだ。

「近道は入学定員減。しかし、現在の6クラスを更に減らして、これまで通り学校行事や部活動を維持するのは難しい。学校の活力を維持するためには、適正規模を保ちながら相乗効果を発揮させ、生徒の力を高めていくしかない」と名越校長は強調する。

鳥取県立倉吉東高校

◎2008年に創立100周年を迎えた伝統校。01年度に策定した全体構想「倉吉東高のかたち」に沿った教育活動を展開する。40年の伝統を誇る学園祭や、国内外の進学校を招いて現代社会の諸問題について議論する「国際高校生フォーラム」など学校行事にも力を入れる。

設立 1909(明治42)年

形態 全日制・定時制／普通科・専攻科／共学

生徒数(1学年) 240名

08年度進路実績 国公立大には、東北大2名、東京大1名、名古屋大1名、大阪大3名、鳥取大23名、広島大6名、九州大5名など194名が合格。私立大には、慶應義塾大2名、早稲田大5名、同志社大3名、立命館大29名など延べ252名が合格。

住所 〒682-0812 鳥取県倉吉市下田中町801

電話 0858-22-5205

WEB PAGE <http://www.torikyo.ed.jp/kurae-h/>



竹歳真一 Takeshi Shinichi
鳥取県立倉吉東高校
教職歴18年。同校に赴任して7年目。3学年主任。「心のバトンをしっかりつなぐ、つなげ！」と生徒に伝えたい。



米村親直 Yonemura Chikano
鳥取県立倉吉東高校
教職歴10年。同校に赴任して10年目。2学年主任。「高い志を持ち、常識ある誠実な高校生を育てたい。」



三谷友来 Mirai Tomoki
鳥取県立倉吉東高校
教職歴24年。同校に赴任して8年目。1学年主任。「二人ひとりの生徒に学びの楽しさを早く発見させたい。」



川本祐子 Kawamoto Yuko
鳥取県立倉吉東高校
教職歴26年。同校に赴任して15年目。進路主任。「壁にぶつかっても諦めず、努力し続ける生徒を育てたい。」



藤原達夫 Fujiwara Tatsuo
鳥取県立倉吉東高校
教職歴26年。同校に赴任して6年目。教務主任。「感謝を忘れず謙虚な心で元気に学び合える関係でありたい。」



河田雅志 Kawada Masashi
鳥取県立倉吉東高校教頭
教職歴23年。同校に赴任して2年目。「失敗を恐れず何事も前向きに取り組む、意欲を持った生徒を育てたい。」



名越和範 Naegoshi Kazuho
鳥取県立倉吉東高校校長
教職歴36年。同校に赴任して10年目。「自己の能力を高め、世のために生かそうとする生徒を育てたい。」

あらゆる教育活動で「生きる姿勢」を育む

同校が21世紀に向けた人材育成の長期ビジョン「倉吉東高のかたち」(図1)を策定したのは01年度のことだ。1)を策定したのは01年度のことだ。「主体的な学習者の育成」を目標として、同校の教育方針を学年単位の教育活動にまで反映させた、全体構想である。

「これからの時代、職員をまとめるためには、学校が組織としての意思を持たなければなりません。そのためには、教育目標や校是が、どのように普段の活動と結び付いているのかということ、教師一人ひとりが常に意識する必要があります。それがやがて生徒にも伝わり、学校全体が同じベクトルに向けて動き出す原動力になるのです」(名越校長)

「倉吉東高のかたち」は、「文武両道」「規律ある生活」「授業の質の向上」「特色ある教育活動」が4本柱。特色は、「主体的な学習者」を育成するための具体的な方策として、教

科指導だけでなく、部活動や学校行事、生活指導が同列に位置付けられている点だろう。「主体的な学びは学習活動だけで育まれるものではない。生活態度の改善による人間性の陶冶、部

活動などで高められる体力、学校行事から得られる達成感、そして高い質の授業。あらゆる教育活動によって『生きる姿勢』が育まれ、学びに對しても主体的に取り組むようになると考えています」(名越校長)



「チューター制」で2、3年生が1年生をサポート

4本柱の土台になるのは「人間教育」だ。特に、1年生は挨拶励行や時間厳守、身だしなみなどを徹底し、社会の構成員としての規範意識を徹底的に体に染みこませるところから始まる。2学年主任の米村親直先生は、次のように述べる。

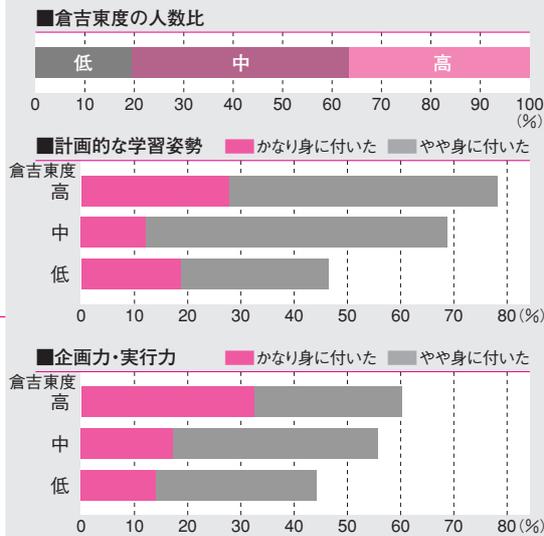
「社会に奉仕・貢献することを自己実現と考えられる高い志を持たせることが、生徒指導のねらいです。そのため第一歩が、規範意識の醸

成です。1年生のうちに生活指導を徹底することで、落ち着いて学習に取り組める雰囲気生まれ、2年生以降、教科指導や進路指導に集中できるようなります」

教師が徹底的に手をかける指導から、生徒が主体的に自己の役割を見いだすようになるのは2年生以降だ。その最たる取り組みは、2、3年生がチューターとして新入生をサポートする「チューター制」である。4人の新入生に対して、2人のチューターが付き、入学前から1年生の夏休み前までの半年間、生活面・学習面でさまざまなアドバイスをします。

図2 「倉吉東度」のデータ分析

3年間の高校生活の中で、あなたは次のものを身に付けたと思いますか



「倉吉東度」とは、「この高校の先生は面倒見が良い」「この高校は文武両道が確立している」「この高校は教育環境が整っている」への肯定度を合成した尺度のこと。高>中>低で倉吉東度が高い。上図から、「倉吉東度」が高い生徒ほど、計画的な学習姿勢や企画力・実行力が身に付いたとする割合が高いことがわかる。倉吉東高校の教育実践が、生徒の主体的な学習態度を育成していると考えられる出典／東京大学高校教育研究会「現代高校生の生活と意識に関する調査」（調査時期：2006年10月）

自覚するようになるのです」

教師が学びの価値を伝える小冊子『学びの復権』

「倉吉東高のかたち」の根幹ともいえる教科教育にも、主体性を涵養する工夫が随所に見られる。

同校では早朝課外、放課後課外は実施していない。土曜日を補習に充てることもない。「文武両道」を柱の一つとする以上、部活動の時間を保障すべきと考えるからだ。その分、年間30回、週末課題・週明けテストを実施して自学自習に向かわせる。その際、漫然とさせるのではなく、実施する意味を生徒に伝えながら生徒の自覚を促すという。

1学年主任の三谷友来先生は「課題やテストは何のためにするのか、どのような力につながっていくのかを絶えず言い続けています。最初は嫌々ながら課題をこなしていたとしても、テストで高得点が取れるようになれば達成感も生まれ、地道に勉強を重ねることの大切さにも気づいてくれると考えています」と言う。

教務主任の藤原達夫先生は「チューターを通して望ましい『東高生像』に触れることで、新入生は目指すべき姿をイメージできます。チューター自身にとっても、理想の姿になりえているかどうか自分の在り方を省みる機会にもなっています」と話す。入学前から夏休み前まで8回に渡って行われる「チューターリング」が、新入生とチューターとの交流の場だ。日々の家庭学習や学級役員・週番の任務、模試、学園祭など、生活指導から教科学習、学校行事まで、新入生の進捗状況や疑問をチューターが聞き取り、アドバイスを加えていく。チューターは主に立候補によって決まるが、適任ではないと教師が判断したときは、生徒の希望を却下することもあるという。3学年主任の竹歳真一先生は次のように述べる。

「多少、不安であっても生徒の希望を受け入れてチューターに選出することもあります。そういう生徒が何か問題を起こして指導を受けたとき、私は『君は担任の先生の顔に泥を塗るのか』と面と向かって言います。そういうやりとりを通して、生徒は自分の生活を振り返り、責任を

大学入試だけを目的とした学びは追求しない——。これも教科教育における同校の方針の一つだ。その象徴が『学びの復権』だ。これはすべての教師が自らの学習体験を基に学びの価値や意味をメッセージとして伝える小冊子である。

テーマは、1年生は学びの意味や価値、2年生は主体的な学習者の理想像、3年生は高い志を持って学び続けることの大切さを説く。この冊子をLHRや「総合的な学習の時間」などを使い、しっかりと読ませる時間を取っていると、同校のこだわりがうかがえる。「人はなぜ学ぶのか、その意味や価値を問うことで、自ら学びに向かう意欲を喚起することがねらい。生徒が共感し、学びについて真剣に考えるヒントになると願っています」と藤原先生は言う。

高校時代の友人の思い出、母親との葛藤、趣味の囲碁やサーフィンの話、倉吉東校生に求めるものなど、教師自身の経験談から、学問の大切さをダイレクトに訴えるものまでさまざま。暗記が苦手というある教師

は「人には個性があり、自分に合った学習の仕方がある」と述べる。別の教師は、孔子の「遊於藝（芸に遊ぶ）」の言葉を引用しながら「知的好奇心を揺さぶられることはそれ自体が楽しみであり、勉強はそれ自体が目的となり得る」というメッセージを寄せた。生徒たちは、普段見ることのない教師の一面を知ること、教師への信頼を新たにするのである。

徐々に指導を緩めるが完全には手を離さない

あらゆる場面に自立に向かう仕掛けを組み込み、主体的な学習者の育成を目指す倉吉東高校。では、同校の教師はどのような場面で、生徒の自立を感じ取るのだろうか。進路部主任の川本祐子先生は「自立した生徒は授業中の表情や目付きだけではなく、答案の名前の書き方も変わってきます。自信が芽生えて、自分を見てほしいという思いが高まっているのでしょ」と述べる。

質問の「質」も変わってくる。「これまででは漠然と『わかりません』と言っていた生徒が、『ここがわかりません』『自分はこう思います』が、先生はどうでしょうか」といった具合に、質問の内容もより具体的になります」と藤原先生は指摘する。

生徒同士が学び合い、励まし合う姿も見られるようになるという。学年集会で「受験に向けて気を引き締めよう」と呼びかける生徒が増えていくという。「自分だけが合格すればよいという自己中心的な考えから脱して、皆で高め合い、共に合格を勝ち取ろうとする意識が生まれていきます」と川本先生は分析する。



写真 「国際高校生フォーラム」の校内予選に向けた準備の様子。このフォーラムでは毎年、国内外の進学校を招いて現代社会の諸問題について意見を交わす。各校の代表チームが出場し、ほかの生徒は裏方に回って汗を流す。運営を通して生徒同士が互いに認め合うことが、一人ひとりの自信につながる

「学習習慣が身に付いていない生徒には、3年生でも家庭学習調査を行い、学習状況をチェックする必要があるでしょう」（三谷先生）

確かなことは、教師が少しでも手を抜いたり気を抜いたりすると、その影響はすぐに生徒に表れるということだ。「学年間・クラス間の差が生まれないよう、何よりも教師自身が個々の力量を高め、しっかりと同じ方向を向いて指導することが大切です」と名越校長は強調する。

「倉吉東高のかたち」はあくまで教育の枠組み。そこに魂を吹き込むのは、教師一人ひとりの強い意志と不断の努力にはかならないのである。

グループ学習での「学び合い」が主体的な学習へ導く

安西高校は2006年度に「安西高校進化論」を策定し、あらゆる活動を通して生徒が支え合う仕組みを築いてきた。グループ学習や学校行事などによつて芽生えた自信を胸に、生徒は自立への一歩を踏み出そうとしている。

学び合いが生み出す温かい校風

「じゃあ、この問いをやってみよう」
教師が声をかけると、生徒は互いに目配せし手慣れた様子で机を動かくり、向かい合つて黙々と演習に取り組む。5分、10分経つと、そこかしこで生徒同士が教え合う姿が見られ始める。
これは、広島県立安西高校の化学の授業の1コマだ。

「ここはどうしてOHになるの?」「そこはカッコを付けなくていいんだよ」
その間、教師は机間巡視しながら、生徒に適宜、声をかける。
「わからなかったら、別のグループに相談して」「今、こんな解答が出たけれど、みんなはどう思う」
ころ合いを見計らい、教師は机をもとに戻すように呼びかけ、演習の説明に入った。
化学に限らず、全学年・全教科でこうしたグループ学習を取り入れている。才木裕久校長は「生徒同士が支

え合うことで教室に温かい雰囲気生まれ始めています」と目を細める。

学校らしい活力を取り戻したい

「安西高校進化論」——2006年度に才木校長が主導して策定した「学校経営改革推進基本計画」の通称だ。同校では、学年の約半数が退学していた時期もあったが、きめ細かな生徒指導により、才木校長が赴任した06年度当時には落ち着きを取

り戻しつつあった。ただ、学校らしい活力に欠けると才木校長は感じた。「土日に学校に来てもだれもない。放課後、生徒は一目散に帰っていく。グラウンドには雑草が青々と茂っている……。どれも非常に残念な光景でした。卒業生や保護者も含めて、もう一度、皆の目と気持ちを学校に向ける必要を感じました」
特別活動部長の近藤和喜先生は、当時の生徒の印象を次のように話す。「勉強、部活動、いづれに対しても無気力な生徒が多い印象がありました。勉強してわかった、部活で勝

広島県立安西高校

◎「清新明朗、友愛協調、不撓不屈」を校訓として、活力ある人間性豊かな青年の育成を目指す。2006年度、「安西高校進化論」を策定し、グループ学習の導入、部活動全員登録制、月1回学校行事の実施など諸改革を進めている。

設立 1979(昭和54)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数(1学年) 約200名

08年度進路実績 公立大には県立広島大、広島市立大に各1名が合格。私立大には龍谷大、大阪芸術大、岡山理科大、呉大、広島修道大、広島工業大などに延べ21名が合格。私立短大には延べ12名が合格。専門学校36名、就職57名。

住所 〒731-0142 広島市安佐南区高取南2-52-1

電話 082-872-1321

WEB PAGE <http://www.yasunishi-h.hiroshima-c.ed.jp/>



近藤和喜 Kondo Kazuyoshi
広島県立安西高校
教職歴11年。同校に赴任して5年目。特別活動部長。「さまざまな経験から、望ましい人間関係を学んでほしい」



清水初美 Shimizu Hatsumi
広島県立安西高校
教職歴20年。同校に赴任して2年目。生徒指導部。「自ら考え、自ら行動できる生徒を育てていきたい」



川口達也 Kawaguchi Tatsuya
広島県立安西高校
教職歴22年。同校に赴任して5年目。教務主任。「教師も生徒に育てられるという雰囲気大切にしたい」

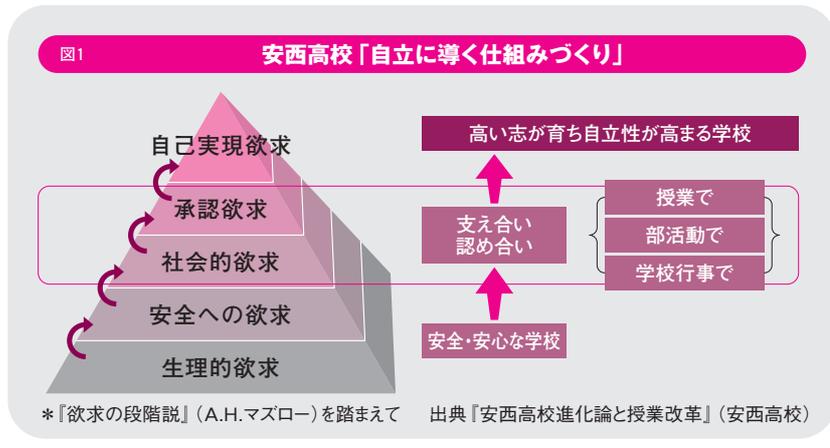


田中真二 Tanaka Shinji
広島県立安西高校
教職歴28年。同校に赴任して6年目。2学年主任。「学ぶ楽しさを知り、高い目標に挑戦させたい」



三堂和生 Mido Kazuo
広島県立安西高校
教職歴33年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。「脳に汗かく学習で、考える楽しさを生徒に教えたい」

「安西高校進化論」のベースは、他人や社会から認めてもらいたいという経験がほとんどないために、勉強しても無駄、部活動で頑張ってもしょうがないという意識が強かったのだと思います」



いう欲求が満たされることで、自己実現に向かう姿勢が生まれるという、マズローの仮説である。授業、部活動、校内行事など学校のあらゆる場面で、支え合い、認め合う仕組みをつくることで、自立を促し高い志を育むことがねらいだ(図1)。学校

の内外から意見を募り、同校の強みや弱み、現状の課題などを分析、同校が目指す方向を定め、取り組むべき方策を体系化した。

「学校を休もうかと迷っているときに、自分を待たせてくれている仲間がいると思えば、学校に自然と足が向きます。一緒に練習しようという仲間がいれば、部活動にも力が入るでしょう。自分が認められている、受け入れられていると感じられれば、安心して前に進む勇気が生まれます。学校教育のあらゆる場面で、自分が必要とされている居場所があると、生徒が感じられる仕組みを提供したいと考えました」と、才木校長は話す。

部活動の活性化を図るために、06年度に体験入部制度を取り入れ、翌年には全員登録制を導入した。更に、仲間意識と学校への帰属意識を高めるために学校行事を概ね月1回は設けるようにした。改革に先立って、一連の取り組みを紹介するビデオを制作。教師が近隣の中学校を分担して訪問し、生まれ変わろうとしている安西高校の姿をアピールした。

グループ学習で学ぶ意欲を喚起

「安西高校進化論」の柱の一つは、生徒同士の学び合いを促すグループ学習だ。取り組みの理論的支柱となっているのは、東京大大学院の佐藤学教授が提唱する「学びの共同体」である。生徒同士の学び合いにより、学ぶ意欲を喚起すると共に、一人ひとりの学習を保障することがねらいだ。進路指導主事の三堂和生先生は、従来の一斉授業との違いを次のように説明する。

「一斉授業は、とすれば教師の一方通行になりがちです。生徒への個別対応が難しく、生徒の理解度を確認したり、生徒が自分の考えを表現したりする機会が少ない。一方、グループ学習は、教師が生徒の理解度を確認しながら授業を進められ、生徒は仲間の表情を感じ合えるために、温かい雰囲気を生み出せます」

一見して、従来の授業と異なるのは教室内の机の配置だ。黒板の前に

コの字型授業

メリット

- ・生徒が主体的に考える時間が多い
- ・人の考えを聴くことができる
- ・アウトプット(表現)の機会が多い
- ・仲間の表情を感じ合える
- ・相互評価の機会がある



導入から2年が経ち、コの字型授業、グループ学習は生徒にすっかり定着している。取材中も積極的にまわりの生徒に声をかけ合っている様子が見られた

グループ学習

メリット

- ・グループに所属することで精神的安定を得られる
- ・今更聞きにくい基礎的な疑問でもグループ内でなら尋ねられる
- ・教える(アウトプットする)ことで、教える本人も理解がより確実になる
- ・3人寄れば文殊の知恵、発展的な問題に取り組む意欲が生じる



グループ学習は、06年度の試行段階を経て、07年度に1年生で導入、08年度には1、2年生に拡大した。3年生では試験的に実施している

教卓はなく、机は「コの字型」に並べられ、必要に応じて4人1組のグループをつくる(図2)。教卓がないのは、教師と生徒の仕切りを取り払い、教師が教室の中央に出やすくするため。机をコの字型に並べるのは、生徒同士が互いの表情を確かめ合うことで一体感が生まれやすいからだ。

グループ学習の方法は授業の内容や教科によって異なるが、教務主任の川口達也先生は「1回の授業で2〜3回行うようにしています」と言う。グループは基本的に4人1組で、男女が交互になるように席順が考えられている。男女を市松模様に配置することによって、グループ内の話し合いや共同作業が一層活性化するという。

2学年主任の田中真二先生は、「普段は話す機会の少ない生徒同士でも、向き合うことによって適度な緊張感が生まれ、だれとでもコミュニケーションできる力を養うことができま」と説明する。

こうした仕組みは、生徒の積極的な授業への参加を促す工夫に見える。ただ、ねらいはそれだけではない。

グループ活動を取り入れたもう一つの目的は、生徒一人ひとりが学びに参加せざるをえない状況をつくることにある。4人1組の話し合いでは、だれもが発言する機会が自ずと生まれる。半ば強制的に学びに向かわせる仕掛けが埋め込まれているのだ。

授業研究を毎月実施し、指導の質を高める

もちろん、ただ机の配置を整えただけで、生徒の「学び合い」が成立するわけではない。グループにするタイミングや切り上げ方、活発にさせる課題の選び方、生徒の主体的な参加を促す声かけ、想定外の展開になったときの対応など、教師が生徒をリードする技術を持たなければ、思うような成果は得られない。

教師は試行錯誤の連続だ。生徒指導部の清水初美先生は、「なかなか生徒から意見が出ないと、もどかしくてつい答えを教えてしまうこともあります。でも、生徒を主体的に参加させるには、待つことが大切です。そして、まず生徒が率直に意見を言

い合えるような雰囲気をつくることも大切。そのためには私自身、普段から生徒とコミュニケーションを取る必要性を感じています」

現在、同校では指導技術を向上させるため、校内授業研究会を毎月開催、ほかに年2回の公開授業研究会を実施して、校外の教師と交流を図っている。他教科の教師も授業研究に参加し、全員が授業の感想を言い合うので、教科の専門的な指導技術だけでなく、教科の枠を超えた議論になることも多い。

グループ学習を導入した当初は、授業の進度が遅れるのではないかと懸念があった。しかし、研修を重ねる中で、それは解決できるとわかってきた。

「重要事項をたくさん話しているように見えても、実は何度も同じことを繰り返したりしていたり、まわりくどく説明したりしている場合も少なくありません。内容によっては、要点を簡潔にまとめたプリントを使ってグループで作業させる方が、効率がよいこともあります」（才木校長）

田中先生は、「学習内容の定着という面から見ると、生徒の発言の機会が多い分、むしろグループ学習の方が効果的」と指摘する。

「知識を定着させる最良の方法の一つは、口に出してみることに。中途半端に理解していることも、人に説明することで間違いに気づいたり、より深く理解できるようになったりします。つまり聞いていた生徒も、グループで話し合うことで、どこがわからないのが明らかにになり、それをきっかけにしてつまづきを解消できます」（川口先生）

グループにすることによって、私語が増えて規律が保てなくなるのではないかという心配もあった。

「長時間、グループ活動をさせたり、易しい課題を与えたりすると、早く終わったグループから私語が始まることはあります。ただ、生徒のレベルに合った課題を出し、課題が終わったらタイミングよく『コの字』に戻せば、雰囲気は緩むことはありません」（川口先生）

経験を重ねる中で、教師も徐々に

手応えを感じ始めているようだ。

学問の面白さに気づかせる指導が必要に

改革の開始から2年が経ち、生徒の様子は大きく変わった。わからないことがあれば、最初に教師よりも友だちに聞いたり、自分で教科書を開いて調べたりするようになった。

日本史担当の三堂先生は、「少し難しい質問をしたとき、以前なら生徒は黙ってしまい、私が話すまで待つ場合がほとんどでした。今では、自分たちで資料集を開いて、写真やデータを見ながら4人で話し合う光景が見られるようになりました。教師の答えを待つのではなく、自分たちで解決しようとする姿は、自立そのものといえるのではないのでしょうか」と述べる。

生徒の変化は、授業にとどまらない。教師が特に感じているのは、学業行事への取り組み方の変化だ。以前は、行事の準備は教師主導で行い、

準備に加わらない生徒もいた。今では、生徒同士が話し合ってから作業を進め、どの生徒も何らかの形で準備に加わるようになった。

近藤先生は、「グループ学習や部活動、学校行事などを通して、まわりの生徒とコミュニケーションを取ることによって、自分を素直に出せる生徒が増えていと感じます。自分を出しても大丈夫だという安心感が、自信につながっているのではないのでしょうか」と成果を実感している。国公立大を含む4年制大への進学希望者が増えているのも、生徒の内的変化の表れといえよう。

今後の課題は、いかに学びの質を高めていくかだ。「グループ学習も定着し、生徒が率直に話し合える雰囲気も生まれてきています。学びの可能性を広げる素地が整った今こそ、学問の面白さに気づかせる指導が必要になっていきます」と三堂先生は考えている。

自立への一歩を踏み出した生徒の前に、安西高校は次のステップへと歩みを進めようとしている。

「頑張る」ことを肯定する雰囲気が 高校にはあった

自立を促す指導は、生徒の成長にどのように影響を与えたのだろうか。学校事例で紹介した群馬県立前橋高校と鳥取県立倉吉東高校の卒業生で、東京大へ進学した2人が、「母校で歩んだ自立への道のり」について語り合った。

授業は先生との 知的コミュニケーションの場

深澤（前橋高校） 高校3年間は部活動一色。ソフトテニスの県大会で団体戦2位になり、関東大会に出場できたのが一番嬉しかったです。

石原（倉吉東高校） 生徒会長や学園祭実行委員長をしていたので、学校には毎日夜9時ごろまでいました。今より忙しかったかもしれません。その分、朝早く学校で勉強したり、

休み時間に予習したりして、授業は復習のつもりで聞いていました。

深澤 学校には「勉強も部活もちゃんとするのが当たり前」という雰囲気がありました。今振り返ると、1、2年生のころは、部活に時間をかけたとしても、勉強がおろそかにならないように、授業や宿題を通して先生方が勉強の方向付けをしてくれていたのだと思います。だからこそ、安心して部活動や生徒会活動に力を入れることができたんだと思います。

石原 受験勉強の効率だけからいえば、授業の時間があったいらないと感じることも正直ありました。しかし、それでも私が真剣に授業を受けたのは、受験のために問題を解くだけではなく、知的で面白い時間を先生方がつくってくださったからです。例えば古文や漢文に詳しい国語の先生は、偉人の言葉を引き合いに出したり、面白い作品を紹介したりしてくださいました。あまり国語に興味がなかった私ですが、「本を読む」こ

との面白さや奥深さを教わりました。

深澤 授業は先生との知的コミュニケーションの場だと思います。授業を聞き、発展的な質問をし、思考が大きく展開することもありました。

石原 同感です。問題の解き方以外のことでも得られるのが授業であって、それを期待していましたよね。

深澤 地理の先生は何事も「守破離」だとよくおっしゃっていました。教えられたことをまず身に付け、自分なりに消化し、独自の方法を生むという意味ですが、母校の指導はそれに似ています。1年生で先生から勉強法を教わり、2年生で自分に合った方法に改良し、3年生で志望校合格に向けて自分の勉強法を見いだす。今もこの過程を大切にしています。

よき友、よき先生との出会いが 私たちを育ててくれた

石原 高校時代、最も影響を受けた友だちは、一緒に東大を目指した2人の仲間です。倉吉東高校という学校の名前に甘えず、とにかく実力を付けて、確固たる自信を持つとうとう3人で勉強しました。

深澤 高校では、同じような志を持

った友だちがたくさんいたので、勉強にも部活動にも思う存分取り組むことができ、とても過ごしやすかったです。切磋琢磨する仲間がいるからこそ、負けたくないと思って頑張り、お互いに励まし合える。そんな関係が存在していたことが、高校生として自立を促してくれたのだと思います。

石原 先生にもいろいろな影響を受けました。現状に満足して弛^なんでしまったクラスに「こんなんじゃないだ」と厳しく言ってくれた先生には、よくわかっていてと尊敬の念を抱きました。生徒に対して強く言わない先生もいましたが、強く言ってもらったから気づくこともあります。だから私は、そういう先生に出会えてよかったです。

肯定し合う雰囲気 自立を促す

石原 高校の外の世界に触れることで、社会の中での自分の価値を考えるようになり、更に勉強に励むことができると思います。だから、母校

で実施している「国際高校生フォーラム」も、私にとっては一つの成長の機会でした。

深澤 高校の先生にお願いしたいのは、生徒の得意な部分、頑張っていることを見つけて、更に外の世界へ

と視野を広げてあげてほしいということです。私の場合、先生に紹介された数学コンテストは特によい刺激になりました。また、先生からガロア理論の本を紹介されましたが、読み進めるうちに数学の世界がとて



石原太一さん
Ishihara Taichi

鳥取県立倉吉東高校卒業（2004年3月卒）
東京大大学院工学系研究科修士課程1年
◎高校時代は演劇部に所属、生徒会会長、学園祭委員長等を務める。現在は制御工学を専攻し、建設機械の開発を目指す

深澤毅倫さん
Fukazawa Takemichi

群馬県立前橋高校卒業（2005年3月卒）
東京大理科Ⅲ類2年
◎高校卒業後、東京大理科Ⅰ類に進むが、2年生のときに医者を目指してⅢ類を受験し直す。高校の部活動で熱中したソフトテニスを現在も続ける

広いことを思い知らされました。

石原 他人から言われて気づくことも、たくさんあると思います。日本は広いし、世界はもっと広い。だから、高校生の日常生活では決して知ることのできない世界をもっと教えてほしい。自分の知らない世界を知ることでも、もっと自分を高めようという意識が生まれると思います。

深澤 生徒がやる気を失うのは、「なぜそんなことをやるの？」というネガティブな雰囲気が生まれてしまったときだと思います。どんなことでもしないよりはした方がいいと私は思っていたし、多くの先生方もそうおっしゃっていました。どんなことでも「頑張ること」が肯定される雰囲気が学校にあれば、高校生はもっと前向きに行動できると思います。私の母校の先生は鉄道にとっても詳しくかったり、肉体を鍛えるのに夢中になっていたり、人生の先輩としてもユニークな方ばかりでした。そんな先生の後ろ姿を見ていたからこそ、自分たちも頑張ろう、頑張ることはよいことなんだ、と思えたのです。

成績中・下位層で「そこそこ志向」が強まる

Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査(中学生版)」より

図1 将来ふつうに生活するのに
困らないくらいの学力があればいい

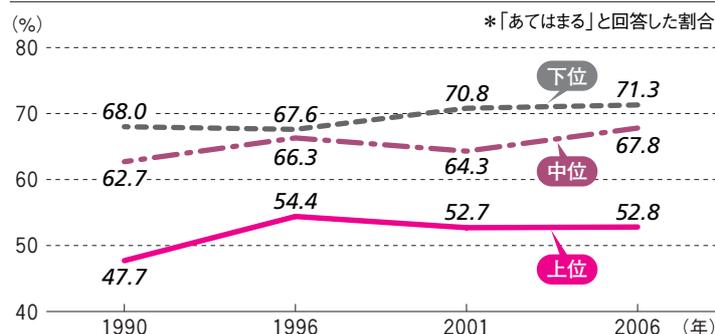


図2 どこかの高校や大学・短大に入れる
学力があればいい

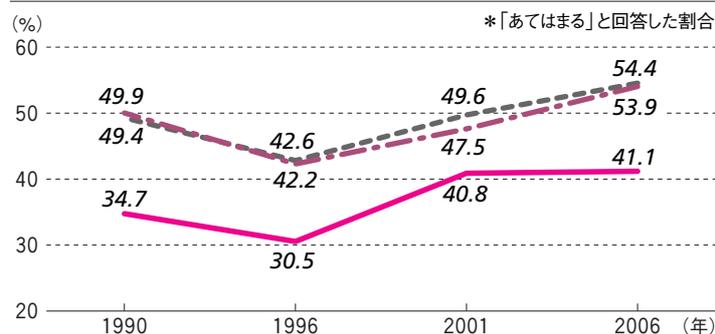
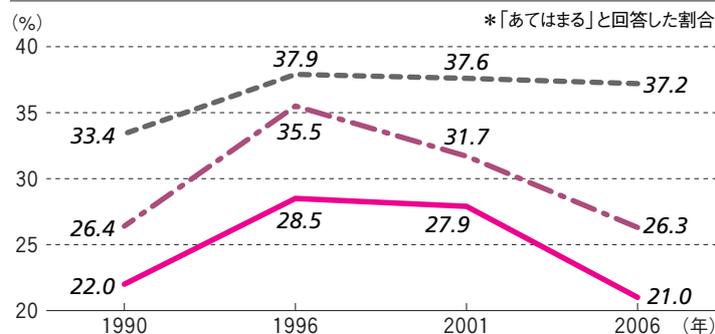


図3 学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない



出典○「学習基本調査」／調査時期○第1回1990年9～10月、第2回1996年5～6月、第3回2001年5～6月、第4回2006年6～7月／調査方法○学校通しの質問紙による自記式調査／調査対象○全国3地域【大都市(東京23区内)、地方都市(四国の県庁所在地)、郡部(東北地方)]の中学2年生、第1回2,544人、第2回2,755人、第3回2,503人、第4回2,371人／成績の自己評価は、「現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか」の項目に「1(上のほう)～3」と回答した生徒を「上位」、「4(真ん中)」を「中位」、「5～7(下のほう)」を「下位」とした

「どこかの高校に入れればいい」という生徒が増加

「生徒の学習意欲が低くなっている」と、高校現場でよく聞かれるが、中学生の学習意欲も変化しているのだろうか。Benesse教育研究開発センターが中学2年生を対象に行った「第4回学習基本調査」の結果を見てみる。

図1～3は、中学生の学力に対する考え方の変化を、成績の自己評価別に分析したものだ。どの項目についても、「あてはまる」と回答すれば、学力に対する意識が低いといえる。

「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」の回答率は、1990年から一貫して高い(図1)。「どこかの高校や大学・短大に入れる学力があればいい」は、1996年にいったん減少したが、その後は増えている(図2)。特に、成績中・下位層の伸びが顕著で、学力にこだわらない様子がうかがえる。また、「学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない」では、成績上・中位層では2001年以降、減少傾向にあるのに対し、成績下位層は横ばいだ(図3)。

成績上位層と、中・下位層で学力に対する意識に差が

成績下位層は3項目すべてで「あてはまる」の回答率が最も高い。また、成績中位層の回答は下位層とほぼ同様に推移しており、成績中・下位層の生徒に「勉強はそこそこできればよい」という意識が強まっているという結果となった。

「成績中・下位層の生徒の学習意欲の低下は深刻」という声は、中学校現場でもよく聞かれる。中学校でも高校と同様、いかに生徒の意欲を向上させていくかが大きな課題の1つのようなのだ。

中学校の現状は

<http://benesse.jp/berd/>

または で

Benesse教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください
→ HOME > 情報誌ライブラリ (中学校向け)

岐阜県立 **関高校**

学力向上フロンティア事業 の継承

「忙しさや意思疎通の難しさを嘆くのではなく
新しいアイデアをどんどん生かしていきたい」

▶▶▶ P.22



指導変革の軌跡

そのとき教師は、そして生徒は
どう変わったか



山形県立 **新庄北高校**

3年間を見通した初期指導

「年2回の学力把握で、課題を短期間に
発見できたので、指導の立て直しも早く図れました」

▶▶▶ P.26

奈良県・私立 かしはら **檀原学院高校**

生徒と深くかかわる チューター制

「『生徒の期待に応えたい』と教師が思えるのも
チューター制のメリットなのです」

▶▶▶ P.30





岐阜県立
関高校

学力向上フロンティア事業の継承

教師の負担削減と 組織力の向上で 「フロンティア精神」を 次代へとつなげる

◎2008年に創立88年目を迎える。「進取の気概・至誠の心・日々錬磨」を校訓とし、「マナーのよい関高生、汗を流す関校生、勉強する関校生」の育成を目指す。03年度から「夢を希望に、希望を現実に」をキャッチフレーズとして、学力向上フロンティア事業を推進。

設立

1921(大正10)年

形態

全日制/普通科/共学

生徒数

1学年約320名

08年度進路実績

国公立大は、筑波大1名、一橋大1名、名古屋大21名、名古屋工業大9名、岐阜大20名、京都大5名、大阪大6名、神戸大2名、奈良女子大3名、愛知県立大6名など141名が合格。私立大には、青山学院大、国際基督教大、明治大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大など、延べ545名が合格。

住所

〒501-3903 岐阜県関市桜ヶ丘2-1-1

電話

0575-22-5688

Web Site

<http://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/>

実践のポイント

- 1 スタンダードテストで学力の底上げを図る
- 2 職員会議を短縮し、教師の負担を軽くする
- 3 分掌と学年が連携し、組織的な体制の構築を模索

学力向上フロンティア事業を契機に進学実績が上がる

県南部の美濃地区にある岐阜県立関高校は、例年100名以上の国公立大合格実績を上げる県下有数の進学校だ。特に2006年度以降の実績は目覚ましい。06年度入試の国公立大合格者は、前年度の109名から152名に増え、07年度は161名、08年度も1クラス減の中で141名だった。名古屋大合格者は3年続けて前年度を上回り、京都大や大阪大にもコンスタントに合格者が輩出している(図)。

躍進のきっかけは、文部科学省の「学力向上フロンティアハイスクール事業(以下、フロンティア事業)」。03年度入学生を対象に3年間の指定を受け、「学力の把握・評価↓学力の伸長・進路目標の実現」をテーマに掲げ、学校改革を推進。独自教材「関高学力スタンダード」の作成、志望大別入試研究会などのさまざまな取り組みは、本誌06年4月号(注1)で取り上げた。フロンティア事業の推進者の1人で、進路指導部長の居波裕先生は次のように話す。

「入学当初は目立たなかった生徒が指導を重ねる中で成長し、現役で難関大合格を勝ち取っていきました。こうした経験を積むことにより、教師が生徒に力を付けさせるために必要なことをイメージできるようになった。教師の自信が、生徒にも『やればできる』という意識を

注1 バックナンバーはBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)

根付かせたのだと思います」

「全学年に定着した 関高学力スタンダード」

同校の躍進を支える取り組みの一つは、前回の記事で最も読者の反響が大きかった「関高学



岐阜県立関高校校長
小島政明
Komura Tadaki

教職歴37年。同校に赴任して1年目。「力に合わせ、志望校を選ぶのではなく、志望校に合った力を付けてほしい」



岐阜県立関高校
杉原 整
Sugihara Hiroshi

教職歴30年。同校に赴任して10年目。教務主任。「常に生徒と夢を語る授業や部活動を心がけた」



岐阜県立関高校
羽賀 均
Haga Hiroshi

教職歴28年。同校に赴任して2年目。進路指導部副部長。「分析・決断・実行」がよい結果につながる



岐阜県立関高校
居波 裕
Inami Yuraka

教職歴24年。同校に赴任して12年目。進路指導部長。「あらゆることに意欲的に取り組める生徒を育てたい」



岐阜県立関高校
国江秀吉
Kunie Hideyoshi

教職歴24年。同校に赴任して6年目。3学年担任。「失敗から這い上がるこの大切さを伝えていきたい」

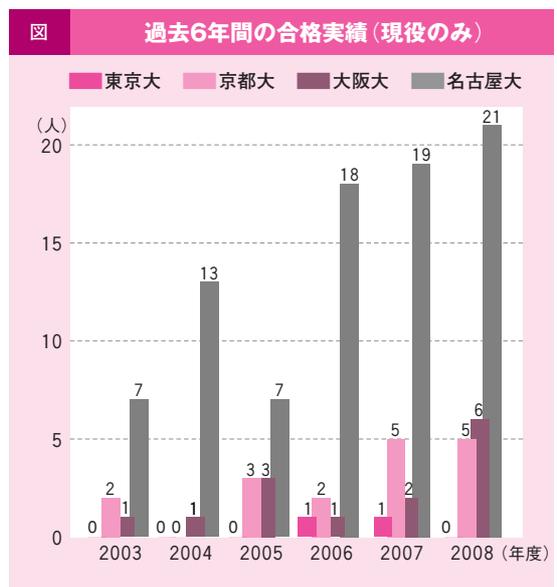
力スタンダード」だ。教師個々の指導のぶれを

できるだけ少なくするために、「関高生としてこれだけは身に付けさせたい」という内容を厳選した独自教材だ。1年生には国・数・英、2、3年生には国・数・英・理・地歴の分をつくる。

内容の定着度は教科ごとに行う「スタンダードテスト」で測る。冊子の完成当初は3年生での実施を見送るなど、足並みがそろっていないが、今では国・数・英は全学年で実施し、学校全体の取り組みとして定着している。フロンティア事業開始から改革を支えた国江秀吉先生は、「スタンダードテストは、合格するまで何度も追試を行います。成績下位層を徹底的に支援し、学力の底上げを図ることが学校全体の勢いになっています」と強調する。

フロンティア事業指定以降の4年間の模試結果を見ると、成績上位層が厚くなり、下位層が大幅に減っている。スタンダードテストの活用と習熟度別学級編成により、学力層に応じたきめ細かな指導を実現した結果だろう。

一方、生徒の学習意欲を意識の面から支えているのが、志望大別の進路指導だ。「名古屋大・岐阜大」「東京大・京都大」の大学別入試研究会は、近隣の高校と連携して、教師が入試問題を分析し、生徒に入試対策を指導する取り組みだ。特に「名古屋大・岐阜大」の入試研究会は、当初、関高校が中心となって、美濃地区の数校の進学校と開催していたが、次第に他学区から



の参加校が増えた。08年度の夏には県下の全高校に呼びかけたところ、15校200名以上の生徒が集まった（P.24写真）。小島政明校長は、「特に難関大については、1校だけでは志望者が少なく、生徒同士の刺激に乏しい。学校を越えた交流によって、生徒はより高い意識を持つようになっていきます」と評価する。

「実施が危ぶまれた 高校生研究者たち」

フロンティア事業以来、躍進が続いている同校だが、道のりは決して平坦ではなかった。

「『高校生研究者たち』に意味はあるのか」
例年、何人かの教師から疑問の声が上がって



写真 名古屋大・岐阜大の入試研究会では、両大学の教員による大学紹介後、大学別に入試傾向分析の解説、国・数・英の指導が行われた。参加した生徒からは「同じ大学を志望する他校の生徒と学べ、緊張感があり、やる気がでた」などの声があり、好評だ

いる。「高校生研究者たち」は、1年生の夏休みの課題研究として、生徒が題材を自由に選んでレポートにまとめるテーマ学習である。自ら課題を発見し、興味・関心を広げる取り組みとして、フロンティア事業開始以来、重視してきた。しかし、準備や発表に労力はかかるのに、学力向上にどれだけ寄与しているのかという実証が難しい。当時の1学年団にはフロンティア事業以後に赴任した教師が多かったこともあり、居波先生らは「高校生研究者たち」の意義を学年団に改めて説明し、快諾を得て実施に至ったという。

「確かにこの取り組みを2年生で別の形で発展させたり、具体的な志望につなげたりといっ

た工夫はできていません。3年間の進路指導の中にきちんと位置づけられれば、実施する意義も浸透すると思いますが、2年生以降は進路行事が目白押しのため、更に掘り下げたテーマ学習を行うのは難しいのが実状です」（居波先生）

「関高学力スタンダード」にも課題はある。冊子は原則として毎年、学年団の教科担当が改訂して、生徒に配付する。ただ、生徒の実態は年々変わり、使用する教材も一定ではない。年度ごとに実情に合わせた改訂が必要だ。また、冊子の作成や改訂を通して、教材研究や分析力、指導力向上に役立てるといってもいいかもしれない。

ところが、実際には最初に作成にかかわった教師が改訂し、事業後に赴任した教師は校正のみに携わる場合がほとんどだという。国江先生は「新しく転任されてきた先生方としては、最初に作成した教師に気兼ねして、大きく変えられないでしょう。改訂には多大な労力がかかりますから、我々としても依頼しづらい面もあります。実際に使う先生方が使いやすいように改訂してほしいのですが……」と打ち明ける。

職員会議を短縮して 時間を捻出

こうした実情は、二つの課題として整理できる。教師の多忙感と、取り組みの継承の難しさだ。フロンティア事業を終えた今、同校の教師

はこの難題に果敢に挑戦している。

近年、教師の多忙感は募るばかりだ。新しい取り組みをしたくても、時間的・精神的な余裕がなく着手できない場合も多い。解決の一策として、同校では職員会議をはじめとして多くの会議の時間を短縮させた。具体的には、会議前に担当者が集まり、内容に応じて3分、5分と持ち時間を決める。担当者は資料の配付で済むこと、説明が必要なことを明確にし、時間内に伝達事項を伝えられるよう段取りをしておく。「要件は簡潔に伝えることが大切。それは、授業でも同じです。話せば話すほど、授業はわかりづらくなる。日常の会議において、わかりやすく話す訓練を意識的に続けることで、時間の使い方がうまくなり、授業改善にもつながります」と、小呂校長はねらいを話す。

こうした取り組みの結果、職員会議の雰囲気は大きく変わった。例えば、「重要な点は○○と○○。前者は解決済みなので資料を入れていきます。後者は議論が必要なので、担当者は後日集まって話し合います」というように、教師の発言は的確かつ簡潔になり、1〜2時間かかっていた会議が30分程度に短縮されたという。

生徒目線で他教科の授業を見て 指導改善につなげる

限られた時間を有効活用する方法として、08

年度には、教科内での授業見学を行うほかに、1週間の期間を設けて、他教科の授業見学を行った。

「担当教科では説明が少し雑でも理解できるので、授業の良し悪しが見えにくい。他教科の授業なら、教師も生徒と同レベルですから、生徒と同じ目線で『ここは説明不足』『ここはわかりにくい』という指摘ができます。しかも、特別な準備がありません」（小呂校長）

他教科との共通点を見いだすことで、自教科の指導改善にもつなげられると、教務主任で英語担当の杉原整先生は指摘する。

『It is true - but』という構文があります。私が見た国語の授業でも全く同じ構文を説明していました。英語の授業で『国語で習ったのと同じように、しかし、"but"の次が大切』と補足すれば、別々の知識を関連付けて覚えられます。生徒の知識を整理し、理解と定着を促す上でも、他教科の授業は参考になりました」

分掌と学年が連携して役割を分担

もう一つの課題は取り組みの継承だ。フロンティア事業が終了した05年度から08年度までで、半数の教師が入れ替わった。フロンティア事業を通して確立した指導スタイル、一つひとつの取り組みに込めた思い、そうした「フロンティア

ア精神」を新たに赴任した教師にいかに継承していくかが、事業を推進してきた教師の切実な課題となっている。

07年度に赴任した進路指導部副部長の羽賀均先生は、赴任時の印象を次のように語る。「生徒の志望を実現させようとする先生方の熱意、教師を信頼して学びに向かう生徒の意欲を強く感じる半面、学年によって手法が微妙に異なることも感じました。教師や生徒が変わっても、『関高』として変わることのない方法を確立し、組織全体が有機的に機能するように工夫すれば、更に素晴らしい学校になると感じました」

そこで、同校は組織力の強化を模索している。分掌と学年が連携して役割分担を明確にし、学校全体が機能する体制を整える。それにより、

教師の労力を削減すると共に、中心的なメンバーが異動しても取り組みが継続できるよう改善していくことがねらいだ。

布石は着々と打っている。学年に任されていた授業評価アンケートの作成や集計は、06年度に教務部に移管された。大学別入試研究会も、かつては学年会が企画を立てていたが、今は進路指導部が受け持ち、学年と連携しながら行っている。

「工夫次第でできることはまだまだたくさんあるはず。忙しさや意思疎通の難しさを嘆くのではなく、新しく赴任された先生方からもアイデアを出してもらい、新しいフロンティアの活動に生かしたいと思います」と、杉原先生は意気込みを語った。

変革の明日を目指して

組織力を強化し 関高の「スタンダード」を 確立していきたい

進路指導部副部長 羽賀均

◎関高校の変身ぶりには、前任校にいたときから注目していました。2007年度、本校に赴任して感じたのは、「何となく東大」ではなく、明確な目標を描かせ、何としてでも志望を実現させようとする先生方の熱意です。成績に合わせて志望校を決めさせるのではなく、進路行事や普段の声かけを通して、更に高い気持ちを持たせようとする姿勢に、躍進の秘訣を見た思いがしました。同時に、私も改めて気持ちを引き締められました。

一方で感じたのは、教師の個の力で生徒たちを引っ張り上げているということです。どの学年、どの先生方も一生懸命なのですが、学年主任の音頭の取り方によって、微妙に手法が異なっている。うまく歯車が回っているときは問題ありませんが、取り組みの意義やノウハウが伝わらないまま教師が入れ替わっていけば、いつかは停滞する危険性もあります。

どんなによい取り組みでも、指導にあたる先生方が何となくかわっているだけでは、全体として成果は上がりません。取り組みを形骸化させないためにも、教師が丸となって同じ方向を目指し、意気込みを持って取り組むことが大切です。組織力の向上に努めて、関高の「スタンダード」を確立していきたい。それが、学校に新たな活力をもたらし、更なる躍進へとつながっていくと思っています。



○2008年に創立109年目を迎えた伝統校。「誠心誠意・質素簡約・勤勉力行」を校訓とし、知・徳・体に調和のとれた豊かな人間性を育てる。生徒の大半が大学進学を志望。部活動はスキー部、吹奏楽部が全国大会で入賞している。駅前のクリーンアップ活動、地域文化行事などのボランティアも盛ん。

設立

1900(明治33)年

形態

全日制・定時制／普通科／共学

生徒数

1学年約200名

08年度進路実績

国公立大は、北海道教育大、東北大、秋田大、山形大、埼玉大、高崎経済大、新潟大、京大などに98名が合格。私立大には、東北学院大、青山学院大、慶應義塾大、日本大、早稲田大などに延べ155名が合格。

住所

〒996-0061
山形県新庄市大字飛田字備前川61

電話

0233-22-6023

Web Site

<http://www.shinjokita-h.ed.jp/>

山形県立
新庄北高校

3年間を見通した初期指導

1年生からの 年2回の効果検証が 早めの軌道修正に 結び付いた

実践のポイント

- 1 春秋の年2回、学力と学習状況、意識を把握
- 2 進路希望調査と進路学習を組み合わせ、1年生から進路を意識させる
- 3 志望校検討会で生徒の様子を把握し、普段の声かけに生かす

「新入生宿泊研修」から
「新入生初期指導」へ転換

山形県立新庄北高校は、2006年度、初期指導の強化に乗り出した。同年に進路指導主事に就いた真木仁先生は、その理由をこう話す。

「学年を離れた立場で学校全体を見たとき、進路指導課としてできることはないかと考えました。私自身、担任をしていたときは目の前にいる生徒の指導で手一杯で、3年間を見通した指導はほとんどできませんでした。しかし、3年生になってから何か仕掛けても、思ったような成果は得られません。1、2年生での進路指導を強化し、低学年からの意識改革を促すことが重要だと考えました」

進路指導課がまず取り組んだのは、英語と数学の初期指導だ。06年度の入学直後の2日間、授業と放課後を利用して、予習の方法やノートの取り方などを実際に体験させるといったものだ。特に家庭学習については、学年全体でオリエンテーションを行ったあと、クラスごとに予習→授業→復習の流れを実際に体験させた。それまでは、各教科の最初の授業で指導していたが、教師が一方的に教えるだけで、生徒に身に付いているかどうかを検証していなかった。

2学年担任の五十嵐春美先生は、「この初期指導では、英語、数学のそれぞれ複数の教師がクラスに入り、チーム・ティーチングで指導

しました。個別に丁寧に指導できるため、生徒も理解しやすかったようです」と評価する。

この初期指導をきっかけに、それまで行っていた新入生宿泊研修をやめて、校内で初期指導の充実を図れないか、という声が上がった。宿泊研修は教師の負担が大きいが、あまり成果が見られなかったからだ。校内での議論を経て、07年度には宿泊研修を廃止。教務課が主管となり、入学式直後の3日間で、各分掌と国・数・英のオリエンテーションなどの新入生初期指導を実施した。数学と英語については、06年度に



山形県立新庄北高校
真木 仁 Maki Hiroshi

教職歴25年。同校に赴任して9年目。進路指導主事。「『継続』が大きな力を生むことを生徒に伝えたい」



山形県立新庄北高校
椎名 貴弘 Shina Takahiro

教職歴21年。同校に赴任して3年目。進路指導課。「身のまわりの事象に関心を持ち、深く考えられる生徒を育てたい」



山形県立新庄北高校
五十嵐 春美 Igarashi Harumi

教職歴18年。同校に赴任して6年目。2学年担任。「生徒の学力だけではなく、人間性を高める指導を心がけている」



山形県立新庄北高校
高橋 美和子 Takahashi Miwako

教職歴14年。同校に赴任して2年目。2学年担任。「常に向上心を持って努力し続ける生徒を育てたい」

実施した初期指導の方法をほぼ踏襲。08年度も同様の初期指導が継続され、学校全体としての初期指導の重要性が認識されるようになった。

データ分析で見えてきた 数学と英語の違い

同校は、初期指導を年度始めだけでなく、学期の始まりや節目の時期にも継続する。日々変化する生徒に応じ、臨機応変な指導が求められるからだ。年1回だったスタディーサポートを、07年度の1年生から春夏2回の実施としたのも、生徒の変化に柔軟に対応するためだ。

「これまでスタディーサポートは入学直後と2年生4月の結果を比較して、学習法や教科に対する意識などを把握していました。ただ、入学直後の結果は、あくまで中学校における指導を反映したもの。本校での指導の成果を1年経ってから検証しては、生徒の変化に対応できません。一度後手に回れば、軌道修正は非常に困難です」（真木先生）

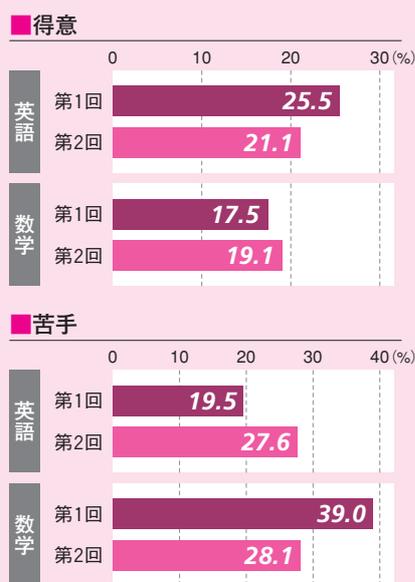
同年の9月上旬には、2回目のスタディーサポートの結果から見えてきた成果と課題を踏まえ、学年集会で「アツブレードガイダンス」を実施。

1学期間の学習の成果を紹介し、生活のリズムや学習法を整えるよう呼びかけた。

スタディーサポートの分析結果は、教師の指導改善にも活用。07年度1年生の2回目の分析結果では、数学では意識や学習時間の伸びが確認できたが、英語では得意な生徒が減り、苦手な生徒が増えるなどの意識の低下が見られた（図1）。そこで、英語科では1学年担当の教師が、授業の進め方や課題の与え方を再考した。

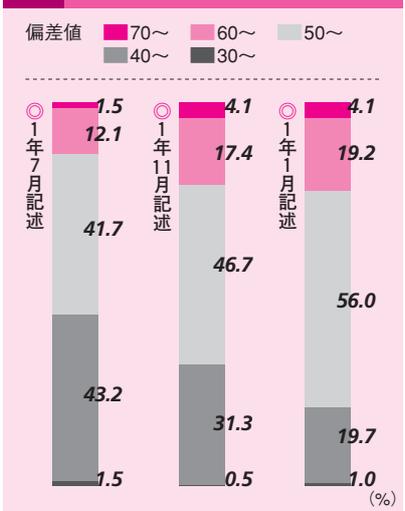
英語担当の高橋美和子先生は、「数学と英語を比べると課題の与え方に違いがあることがわかりました。数学科は『日々演』というプリントを毎日課していました。英語科では『次のテストまでにテキストのこの範囲をやつてきなさい』というように、課題の指示が漠然としていました。生徒は具体的に何に取り組みやすいのかわからないという状況でした。第2回のス

図1 07年度1年生の学習状況調査結果



スタディーサポートを第1回は4月、第2回は9月に実施。「学習状況リサーチ結果」では、数学では「得意」と答えた生徒が増加した一方、英語では「苦手」意識を持つ生徒が増加した

図2 進研模試点数分布推移(英語)



タディーサポートで、英語が苦手と回答した生徒が増加しているのがそのことを顕著に物語っていました」と話す。

そこで、数学科が行っていた「日々演」を、「デイリーイングリッシュ」として取り入れた。日々学習すべき内容をプリントにして具体的に示すことによって、休み時間や放課後に課題に取り組み生徒の姿が見られるようになった。

更に、授業の進め方や予習の方法など、英語の指導全体を見直したところ、11月の進研模試では7月と比較して、成績上位層が増加し、成績下位層が減少する結果となった(図2)。

五十嵐先生は、「模試でもスタディーサポートでも大切なのは、その結果を教師がどのように指導改善に生かしていくかということです。結果をしっかりと分析し、次の指導につなげていくよう教師一人ひとりが意識しなければなりません」と話す。

進路希望調査に理由も書かせ 志望への意欲を高めさせる

進路希望調査は07年度の1年生対象分からリニューアルした。志望大・学部名だけでなく、学問内容や卒業後の進路についても細かく記入させる(図3)。進路指導課の椎名貴弘先生は、そのねらいを次のように述べる。

「以前の調査は全体動向の把握が主な目的となっていて、個々の生徒の志望について、教師が活用できる材料にはなっていませんでした。生徒も大半は調査票を出すだけで、本気に考えて書いてはいませんでした。自分で調べて書くことで、大学の学問内容を把握させると同時に、志望に対する意識を高めたいと考えました」

実施時期は4月、9月、1月の年3回。1年生4月は志望大・学部・学科、学問内容、卒業後の進路のみだが、それ以降はセンター試験の科目・配点やボーダー得点率、個別学力試験の科目と配点、直近の自分の模試成績、弱点分野と克服の対策についても書かせる。「3年生になってもモチベーションが上がらないのは、生徒自身、その大学に行き

図3 進路希望調査(07年度1年生1月)

1年生3回目の進路希望調査。この時期から志望大の入試について調べ、自己の実力と志望との擦り合わせを行わせる。2年生2回目(9月実施)からは志望理由まで記入させる予定だ

たい理由をわかっていないからです。推薦入試を希望する3年生の中には、志望理由を言えない生徒がいます。自分の適性や将来の展望を早期に考えさせる必要性を痛感します」(五十嵐先生)

もちろん、最初からすんなりと記入できる生徒は稀だ。特に1年生の最初の調査では、教師が繰り返し面談を行い、生徒の適性や希望を引き出したり、大学・学部研究の方法について手取り足取りレクチャーしたりする。生徒によっては3~4回面談を行い、1か月以上かけて調査票を完成させることも珍しくないという。

「1・2年生の生徒が進路資料室で赤本や大学年内を開く姿を多く見るようになりました。2年生の段階で志望理由まで明確にし、3年生

はその実現に向けて学習に打ち込めるようになっていきたい」と真木先生は抱負を述べる。

1年生にも志望校検討会を行い 学年団全体が個々の志望を把握

教師同士の意識の共有を徹底させるために、07年度の1年生から年2回の志望校検討会を始めた。それまでは3年生の秋に予備検討会、センター試験直後に本検討会を行っていたが、1年生秋に文理分け検討会、1年生3月、2年生秋と3月に志望校検討会を取り入れた。学年団と進路指導課が一堂に会し、模試結果と志望校を比較しながら生徒一人ひとりの志望を考える。

検討会でベテラン教師から「この生徒ならもっと上を目指せる」といった意見が出れば、若手教師も自信を持って上の大学を目指すよう生徒に勧められる。また、生徒全員の志望を把握することで、他クラスの生徒に対しても普段の教科指導とは異なる観点から声をかけられる。高橋先生は、「国際関係を志望する生徒に『この本を読んでみたら』というようなアドバイスを意識的にできるようにしました」と話す。実は、志望校検討会の最大のねらいはこうした生徒とのコミュニケーションを通して信頼関係を築くことにある。「指導で最も重要なのは生徒との信頼関係。『先生たちはみんなを一人ひとり見ている』というメッセージをさりげな

く送ることで、生徒の意欲を高めていきたいと考えています」と、真木先生は期待を込める。

実績を出すことによって 取り組みを全学年に広げたい

現在、卒業生に「人材バンク」へ登録してもらい、アンケートで大学生生活の状況、後輩へのアドバイスなどの情報を集め、「進路通信」を通じて生徒に紹介している。今後は、生徒の意識向上のため、志望大別の学習会、卒業生による学部・学科ガイダンスなどを取り入れていく。課題の一つは、担任の負担軽減だ。「部活動顧問なども巻き込み、指導を分担できる体制を検討しています。生徒と最も向き合うのはあく

までも担任ですから、担任が困ったときは、ほかの教師がいつでもサポートできるようにしたい」と真木先生は打ち明ける。

現2年生が中心に取り組んできた活動を全校に広げ、同校のスタンダードとして定着させることも重要だ。同校には、効果があると思えば、教師の負担が大きくても全校を挙げて取り組む風土がある。学習記録を毎日生徒に書かせてチェックする取り組みを、全学年で実施しているのもその証拠といえる。

「改革を全学年に波及させるためにもしっかりと成果を上げ、すべての先生に効果を実感してもらうことが大切」と真木先生は強調する。初期指導を強化し始めた現2年生の実績が「スタンダード」確立の鍵を握っているといえそうだ。

変革の明日を目指して

ベテラン教師の助言と叱咤激励によって 担任として成長

2学年担任 高橋美和子

◎2007年度、本校で初めて1学年の担任をしました。赴任したばかりで先が見えず、担任としてどのように指導していけばよいのか、明確なイメージを描けませんでした。そうしたときに07年度2回目のスタディーサポートの結果が出てきました。数学は伸びているのに、英語は全く逆の線を描いている。真木先生や学年主任から指導の見直しを求められました。厳しい状況でしたが、今思えば、あのときに課題が明らかになったからこそ、早急に対策が立てられ、生徒の意識を立て直せたのだと思います。

進路指導の面で大きな支えになったのは、志望校検討会です。ある地方国立大の法学部を目指していた生徒に対して、ベテランの先生方から「もっと上を目指せる」というアドバイスをいただきました。それを本人に伝えたところ本気になり、次の進路希望調査で東北大を第1志望に挙げてきました。先生方に見守られているという意識が、生徒の勇気を引き出したのでしょう。

来年はいよいよ受験の年です。今は「デイリーイングリッシュ」などで手取り足取り指導していますが、与えられたものをこなしているだけでは、高い志望は達成できません。進路指導課や学年団の先生方に助けていただきながら、生徒が自立的に学習する力を身に付けられるよう指導を工夫していきたいと思っています。



奈良県・私立
檜原学院高校

生徒と深くかかわるチューター制

チューター教師と 担任の連携で 生徒の内面に 深く切り込む

◎2008年に創立45年目を迎えた。「新風—NO 1へ挑戦—」をキャッチフレーズに、常にグローバルな視野に立って考え、行動できる人物の育成を目標とする。国公立大・難関大を目指す特進コース、関西6大学を目指す標準コース、美術系大学合格を目指す美術科を設置。部活動は陸上、レスリング、弓道などが、近畿、全国大会で活躍。

設立

1964(昭和39)年

形態

全日制／普通科・美術科／共学

生徒数

1学年約140名

08年度進路実績

国公立大は、徳島大1名、都留文科大1名が合格。私立大には、日本福祉大、京都嵯峨芸術大、京都産業大、同志社大、同志社女子大、立命館大、龍谷大、大阪芸術大、大阪工業大、関西大、関西福祉科学大、近畿大などに延べ112名が合格。

住所

〒634-0063 奈良県檜原市久米町222

電話

0744-27-3242

Web Site

<http://www.kashigaku.ed.jp>

実践のポイント

- 1 生徒自身が教師を選ぶ「チューター制」を導入
- 2 担任とチューター教師が連携し、生徒の状況を的確につかむ
- 3 少しレベルの高い早朝テストで、生徒に自信をつけさせる

**特進コースを設置し
進学重視の指導となるが…**

「あともう一步で合格点だな」

「この問題集をやってみたらどうだ」

檜原学院高校の職員室やカウンセリಂಗールーム、廊下の隅では、生徒と教師が一对一で向き合う姿がよく見られる。話題は学習や志望校選びだけではない。日々の悩みや将来の夢、ときには恋愛のことまで話す。生徒がリラックスしているのは、目の前にいる教師が自ら選んだ「チューター」だからだろう。チューターは、生徒自身が担任以外から1人の教師を選び、1年間、相談役になる「もう1人の担任」だ。生徒の本質に迫ろうと、3年前に導入した。

同校が特進コースを設置し、本格的に進学校へと脱皮を図り始めたのは13年前のことだ。国公立大・難関私立大の合格者増を目指し、新たなカリキュラムや進路行事を取り入れ、授業時数や補習は可能な限り増やした。しかし、設置から3年経っても、思うような成果が得られなかった。ようやく合格者が増えたと思えば、次年度は突然減るといふように、実績が安定しなかった。年度によって学年全体の学力レベルに多少の違いがあるとはいえ、必ずしも進学実績とは連動していなかったのだ。進路指導部長の松下幸大先生は、次のように述べる。

「実績が上がった要因は何か。進路指導部や

教師同士で何度も話し合いましたが、結論は出ていません。ただ確実にいえるのは、実績が出た学年の教師は、生徒と徹底的に『かわわって来た』ということでした。制度的な枠組みを整えるだけではなく、指導にあたる教師一人ひとりが、いかに生徒の本質に迫れるかに焦点を絞る必要があると考えました」

徹底的にかかわることで 生徒の内面に迫る

教師が徹底的にかかわることによって、生徒の内面に光を当てて。その方針を具体的な形にしたのが、冒頭に紹介した「チューター制」だ(図)。教務部長の木村隆博先生は「生徒の本音



檀原学院高校
松下幸大 Matsushita Yukio
教職歴・赴任歴共に23年。進路指導部長。「『継続は力なり』というのを生徒に伝えていきたい」



檀原学院高校
木村隆博 Kimura Takahiro
教職歴・赴任歴共に24年。教務部長。特進コース担任。「『モットーは』泣かない、負けない、気にしない」



檀原学院高校
上田修平 Ueda Nobuhiro
教職歴13年。同校に赴任して10年目。特進コース主任。「常に感謝の気持ちを忘れない生徒を育てていきたい」

に迫るために何よりも大切なのは、徹底的に話すこと。教師もできる限り自分をさらけ出す。そうした深いかわりの中でしたか、生徒の本当の姿は見えてこないのです」と強調する。

チューター制は2、3年生で取り入れている。生徒は、新任教師を除いて、常勤教師全員の中から1人を選ぶ。毎年5〜6月、申請書に第3希望まで、第1希望の教師については理由も添えて提出する。基本的に、教師が引き受ければ申請はそのまま通る。そのため、特定の教師に登録が集中することもあり、例えば、木村先生には最多の49人が登録している。

申請の理由は生徒によってさまざまだが、圧倒的に多いのは「話しやすい」「信頼できる」だ。美術科の生徒ならば「悩みを理解してくれる」教師、特進コースの生徒ならばあえて苦手教科や受験科目の担当教師を選び、個別指導を求めるところもある。「意欲の高い生徒が選ぶのは、必ずしも『優しい先生』ばかりではありません。厳しい教師ほど愛情を持って接してくれていることを、生徒はしっかり感じ取っているのです。生徒が教師に何を求めているのかが鮮明になりました」と木村先生は話す。

チューターの登録は1年ごとに更新するが、3年生の登録時には、多くの生徒が2年生と同じ教師を指名する。チューターに対する生徒の信頼度、満足度の高さを示しているといえるだろう。

ちなみに、1年生の段階ではだれが自分に合っているかわからないとして、チューター制は実施していない。1年間は、どの教師に登録するのかを検討する期間としている。

生徒から寄せられる期待が 教師の熱意を引き出す

生徒とどのように接するのか、どこまで面倒を見るのかは、すべてチューターに任せられる。「担任や教科担任ではない教師に、進路や勉強の相談をするのは、生徒にとって気が引けるものです。しかし、チューターという存在が決まっていれば、生徒は担任や教科担任に遠慮し

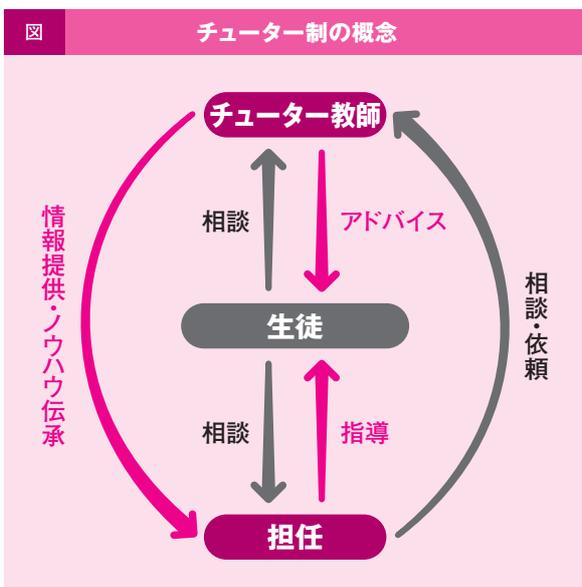




写真 チューター・担任にかかわらず、普段からよく生徒に声をかけている教師に、多くの生徒が集まる傾向が強い。積極的に生徒にかかわっていくことが、生徒の信頼を得る重要なポイントのようだ

なくて済む。信頼する教師との接点を保証することが、学習や進路に対する意欲につながると考えました」（松下先生）

生徒とチューターが話すのは、休み時間や放課後などの時間が大半だが、携帯電話やパソコンのメールを使つての相談も多い。教師によっては、行事や試験の前には1日に十数通ものメールが送られてくる。メールを使つて、夜中まで勉強や小論文の指導を行う教師もいる。この方法ならば、大勢の生徒と時間を気にせずコミュニケーションが取れ、個々の生徒のプライバシーも守れるからだ。

「生徒の期待に応えたいという意識を教師に

持つてもらふことも、チューター制のねらいの一つ」と松下先生。個別に学習を指導したり、問題集を薦めたりする教師は増えている。

担任との連携により 多面的な指導を実現

ただ、指導の中心は担任であり、チューターはあくまでサブだ。学習の悩みや進路選択にかかわる話があったら直ちに担任と共有し、生徒の多面的な把握に役立てる。

木村先生は、「チューターが深い話にまで立ち入るのは、担任から依頼があったとき、あるいは生徒の様子が普段と違うようなときだけです。担任の役割や立場もあるので、あまり出しやばりすぎないように心がけています」と話す。

しかし、担任と合わない生徒や、話の内容によつては担任に話しにくい場合もある。チューターとの連携によつて、担任だけでは解決が難しい課題にあたることも多い。特進コース主任の上田修平先生は、チューターの役割の一つについて次のように話す。

「自信がないために、力がありながら安易な選択をする生徒は多くいます。逆に担任の前では意地になって、非現実的な志望にこだわる生徒もいます。担任だけでは手に負えないと感じたときは、チューターから話してもらふよう担任が依頼し、よりよい志望校選択へ導くように

しています」

生徒と適度な距離を保ちつつ、いかに担任と連携するかが、チューターの腕の見せどころといえそうだ。

若手教師の育成という面でも、チューター制の利点は大きい。チューター制は、教師と生徒の距離を縮められる半面、馴れ合いの関係に陥りやすい。特に若手教師の場合は、選んでもらった嬉しさや気安さもあつて、友だち関係のようになることもある。

中でも問題なのは、生徒の言葉遣いの乱れだ。職員室などで若手教師が指導している場面を見ると、若手教師はさりげなく見ながら、注意すべき点があれば、雑談交じりに「あれは教わる側の態度ではない」などと注意を促す。なるべく教師本人から生徒に注意させるようアドバイスしている。「何事においても節度を守ることが大切。それが気持ちの切り替えにつながり、よい結果を生むのです」と、松下先生は強調する。

「自信を与える指導」が 生徒を自立へと導く

同校では「自信を与える指導」によつて、学校全体が抱える構造的な課題にも向き合う。同校の成績層は偏差値33〜50と幅広く、特進コースでも半数以上が公立校との併願で入学する。入学当初は自分に自信がなく、殻を破れない生

徒も多い。

進学コースで1年生から国数英の早朝テストを実施しているのも、単に単語や漢字、公式を覚えさせるためではなく、課題をクリアすることで得られる達成感、そこから生まれる自信を大切にしているからだ。テストは生徒の実力よりも高めのレベルでつくり、努力すればできることを実感させるようにしている。1回で合格した場合は教室の後ろに掲示した名簿にシールを貼り、達成度が目に見えるようにする。

「最終的に希望進路を実現するのは、こつこつと実績を積み上げて自信をつけた生徒です。経験を通して得た自信が、最後まで妥協せず目標に向けて努力する気持ちを生みます。『自立した生徒』とは、このように自信を持って、自分自身の進路を切り開く生徒をいうのではないのでしょうか」（松下先生）

「自信を与える指導」は、担任とチューターとの連携によって、より効果を発揮する場合も多いという。

「国公立大の理系学部を目指していた生徒が、国語の成績で伸び悩んだために自信を失い、理系教科まで成績を下げたことがありました。模試で現代文の成績が上がったのを見て、チューターの先生が褒めたところ、生徒は自信を取り戻し、理系の成績も再び向上き始めました。成績のわずかな変化も見逃さず、褒めたり励ましたりすることで、自分の実力に自信が持てるよ

うになるのです」（上田先生）

「自信を与える指導」を徹底した結果、生徒に粘り強さが見られるようになり、3月末まで受験する生徒も増えたという。現役進学率96.8%という実績が、それを端的に示している。

教師一人ひとりの情熱が 生徒の力を伸ばす

今後の課題は、生徒がチューター制をより活用できる環境を整えることだ。現在は、生徒とチューターとがかかわるのは生徒が希望するとき、あるいはチューターが気になる点があるときなどが多い。今後は、チューターと生徒がかい合う場や時間を設定するなどして、生徒が

一層チューターにアプローチしやすい条件を整備していく。チューター制が若手担任の指導力向上に寄与している点でも、指導ノウハウを全校的に広め、定着させるための工夫も必要と考えている。

松下先生は、具体的なノウハウだけでなく、指導にかける「情熱」を共有することが、目下の課題であると明言する。

「時間と手間をかけても、『生徒の力を引き出したい』という熱意がなければ、生徒は伸びません。私たちの目標は、すべての生徒に『檀原学院に来てよかった』と思ってもらうこと。そのため、自分に何ができるかということ、教師一人ひとりが真剣に考え、話し合えるような学校文化をつくっていきたくと思っています」

変革の明日を目指して

若手教師と積極的に コミュニケーションをし 「情熱」を共有したい

特進コース主任 上田修平

◎2007年度、私は3年生の特進コースの担任をしました。クラス運営や進路指導の上で、心強い味方だったのがチューターの先生方です。特に、ベテランの先生方のアドバイスには、生徒はよく耳を傾けてくれるので、指導が浸透しやすくなりました。私では聞き出せない生徒の本音を引き出してもらうことも多く、クラスの状況を把握する上でも参考になりました。例年以上の進路実績を残せたのも、チューターとの連携がうまくいったからだと思います。

ベテランの先生方は、巧みに生徒の心の中に入っていきます。チューターの一言で、生徒の態度ががらりと変わることも珍しくありません。あれほどかたくなだった生徒が、自信を失っていた生徒が、チューターの先生と話したあと、晴れ晴れとした顔で帰ってくる。私自身のスキルアップのためにも、チューターの先生に具体的な会話の内容や、そのときの生徒の様子を聞くようにしています。ベテランの先生は生徒がどのような思いを抱いているのかをしっかりと聞き、その上で諭すように話されていることがよくわかりました。

今後は、ベテランの先生方から教えていただいたノウハウを、私自身が若手の先生方に伝えていく番です。学校全体で「情熱」を共有していくためにも、今以上に、教師同士でコミュニケーションを密にしていきたいと思っています。

好奇心のおもむくままに得た知識が 研究者としての土台を築いた

S A T O S H I

北里研究所名誉理事長 日本学士院会員

大村 智

天然有機化合物の研究において世界的な権威である大村智北里大名誉教授。独創的で多彩な手法を通じて、微生物が生産する化合物を約400種類も発見した。そのうち20種類が、現在も医薬や動物薬、農薬、研究用試薬として世界中で使われている。大村教授の研究の原点と独創性の源をうかがった。

土の中の微生物が7000万人を救う

1グラムの土の中に、微生物がどのくらいいるか知っていますか。その数、なんと1億個以上。微生物は肉眼で確認するのも難しいくらい小さな生き物ですが、有用な化合物をつくり出すものもあります。例えば、現在使われている薬の約4分の1は、微生物の生産する化合物からつくられているのです。

1979年に私共が発見した抗寄生虫薬エバメクチンもその一つです。エバメクチンを基にしてつくられた薬は主に畜産に貢献し、20年余りに渡って世界の動物薬の売り上げ1位を記録しています。この薬は人間の寄生虫にも効果があり、アフリカの風土病で重度の視力障害を引き起こすオンコセルカ症の特効薬として、1年間で7000万人以上の人々に投与され、失明から救っています。

そうした素晴らしいパワーを持つ微生物と出会ったのは、化学を学んできた私が恩師の誘いで、山梨大の発酵生産学科で助手をしていたときです。微生物の一つである酵母で発酵の実験をしていたとき、酵母の働きによってブドウ糖があつという間にアルコールに変

化する様子が心が揺さぶられました。「人間ができないことを可能にする微生物はすごい」。この出会いが、私の研究人生の出発点になりました。

人の役に立つ薬をつくりたい

微生物の研究を本格的に始めたのは、北里研究所に入所してからです。研究所には、創立者であり伝染病の研究で歴史に名を残した北里柴三郎博士の教えである、「実学じつがくの精神」が根付いていました。また、私の師である秦藤樹先生は、抗ガン剤として使われているマイトマイシンの発見者であり、私も「なんとかして人に役立つような薬をつくりたい」と思ったのです。

志は高く掲げたものの、当時の研究所には十分な研究費がありませんでした。日本の研究者の研究費はアメリカの20分の1程度だったのです。私は世界中を飛び回り、経済的な支援をしてくれる企業を探しました。今でこそ国際的な産学協同研究は当たり前ですが、当時は珍しく、「企業の片棒を担いでいる」と批判的な声が多量ならずありました。しかし、私は「よい薬をつくるには協同研究が必要だ」と周囲を説得し、研究を進めていったのです。

そして、年間2000〜3000種類もの微生物を土壌から分離して調べ、微生物がつくる新しい化合物を探しました。化合物を見つげるだけでなく、それらの持つ作用を分子レベルや細胞レベルで解析、医薬品素材としての可能性を追求していったのです。

だれも知らない微生物を発見しようとしているのですから、そう簡単に研究は進みませんでした。そんな



O M U R A

ときは、自分の状況を高校・大学時代に熱中していたクロスカントリーに置き換えました。長距離競技では雪山を15kmも走ります。コースの途中に必ずある上り坂で「もうダメだ……」と気持ちが途切れそうになることもありましたが、しかし、「この坂を越えればゴールは近い」と自分に言い聞かせ、次の一歩を踏み出したのです。高校3年から大学4年まで県大会で5年連続優勝し、国体にも出場できたのは、諦めかけたときに、ぐっとその気持ちを抑えて踏ん張ることができたからだと思っています。頑張れば必ず結果につながる。これは研究においても同じです。辛いときこそ気持ちを奮い立たせ、前へ前へと進んでいったのです。

学問は日常の小さな疑問や発見から始まる

35年以上の研究生活を通して、私はエバームクテンをはじめとする微生物由来の有用な天然有機化合物を20種類発見しました。こうした成果を上げられた最大の理由は、行動力や忍耐力だけでなく、「独自のことをやると失敗する場合もあるが、人を超えるチャンスが生まれる」と考え、微生物の作る新しい化合物を見つけ出す方法を独自に確立したことにあると思います。アイデアの源になったのは、山梨大の学生時代に学

んださまざまな分野の実験や知識でした。当時の大学は1年次から研究室に自由に出入りし、好きな実験ができるようになっていました。私は化学を専攻していましたが、有機化学、無機化学、物理化学など幅広く学びました。ほかにも、興味があった生物学、地学、人体生理学などの講義を受けました。今思えば、一つの学問領域にとどまらず、好奇心のおもむくままに学んだことが、私の研究者としての基礎を築いたのでしよう。事実、有機化合物の構造決定に、早期に鉱物を解析するのに使うX線結晶構造解析を用いることを何のためらいもなく行えたのも、鉱物学を学んだ経験を生かしたものでした。

学問というのは、学者によって発見されるものではなく、むしろ、人々が日々の生活の中で見つけた小さな疑問や発見が積み重なってできたものだと、私は思います。そして、疑問や発見は、大学で机に向かって論文を書くことだけから生まれるわけではありません。毎日の生活や普段の勉強にヒントがあることを是非知ってほしいと思います。何か面白い現象を体験したら、自分なりに考え、調べ、わからなかったら人に聞いてみる、実験する、そして理解する。その過程こそが学問を形づくっていくのです。

おむら・さとし 1935年山梨県生まれ。山梨大学芸術部自然科学科卒業。東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了。山梨大工学部発酵生産学科助手を経て、北里大薬学部教授、北里研究所理事・所長などを歴任。現在、学校法人北里研究所名譽理事長、北里大名譽教授、女子美術大理事長。90年日本学士院賞、92年紫綬褒章、2005年米国化学会アーネスト・ガンサー賞など国内外で受章多数。

◎本コーナーに登場する研究者は日本学士院の会員の方々です。日本学士院は、学術上功績のあった科学者を優遇するための機関で、人文科学70名、自然科学80名が在籍し、新会員の選定、公開講演会などの活動を行っています。会員に選定されることは研究者として名譽なこととされ、また日本学士院賞は我が国の学界では最も権威ある賞として、毎年初夏に行われる授賞式には天皇皇后両陛下が臨席されます。 <http://www.japan-acad.go.jp/>

食品衛生学と薬学の融合

静岡県立大大学院生活健康科学研究科 食品栄養科学専攻

「健康と長寿」は人類の永遠のテーマである。静岡県立大は、「薬食同源」の思想をベースにこの課題に取り組んでいる。お茶やワサビなどの地元の産物を生かし、食品を活用した疾病の予防、新薬への応用を目指している。



食品衛生学って?

食べ物の安全性を科学的に追究

食品衛生学は、安全面から食品にアプローチする学問分野だ。輸入食品・加工食品の安全性確保、食品添加物の管理、食中毒の防止、食物アレルギーの予防など、「食の安全」にかかわる知識・技術を学ぶ。サプリメントなどの機能性食品の登場により、薬学的な視点も重視されつつある。静岡県立大では、「薬食同源」の思想を基本として、薬品と食品の融合を図り、薬と食品の相互作用の解明、安全で効果的な薬の開発、植物成分の食品への応用などを研究している。



大学での最先端の研究を通して、生徒に学問の面白さや奥深さを感じてもらおうコーナーです。

教授が語る

「薬食同源」を基盤に 薬品と食品とを融合させ 健康長寿の実現を目指す



木苗直秀 教授

きなえ・なほひで 静岡薬科大(現静岡県立大)大学院薬学専攻科博士課程修了。静岡薬科大薬学部講師、静岡県立大食品栄養科学部助教授等を経て、現在、静岡県立大理事、副学長、食品栄養科学部、大学院生活健康科学研究科教授、グローバルCOEプログラム拠点リター。薬学博士。専攻は食品衛生学。主な著書に『健康と長寿への挑戦！食品栄養科学からのアプローチ』(編者、南山堂、『ワサビのすべて』日本古来の香料を科学する)『共著、学会出版センター』などがある。

研究の背景

薬品と食品を融合し 安全で使いやすい 新しい薬をつくる

中国には古来より「薬食同源」という言葉があります。バランスの取れた食事をとれば病気にはならないし、病気になる時は食を正すことが第一の治療となる。それでも治らない場合は、薬草、今でいう漢方薬を使うという発想です。

私たちの研究は、この「薬食同源」の考え方を共通認識として、健康を保つための食品の活用や、食品と医

薬品を組み合わせることで新しい薬をつくり出すことなどを目的としています。薬の開発には莫大なコストがかかります。新薬をつくるためには100〜200億円、期間は10〜15年かかるというのが一般的です。しかも、一つの薬をつくるために、何千、何万種類もの化学物質を検討しなければなりません。医薬品の多くは人体にとって異物ですから、副作用などのマイナス面もあります。

ところが、食品は元々人間が食べってきたものです。抗酸化性、抗発がん性など、病気に対して有効な成分

が含まれているものも多くあります。そこで、私たちの大学には食品栄養科学部と薬学部があるという利点を生かし、従来からある薬と食品を組み合わせて、より使いやすく、より低コストな医薬品をつくらうとしています。

研究で気をつけているのは、地元・静岡県の特産物を生かすことです。気候風土に恵まれた静岡県は海の幸、山の幸が豊富で、生産高日本一のお茶やワサビ、ネーブルオレンジをはじめ、生産高トップ10に入る産物が78品目もあります。そのメリットを生かし、地元の産物を研究に活用しています。ワサビの葉やサクラエビのヒゲなど、今まで廃棄されていた部分の有効な活用方法を見つけ、環境問題にも貢献したいと考えています。

研究テーマ

沢ワサビの成分が 副作用を防ぎつつ 薬の効果も保つ

こうしたコンセプトで提案した「先導的健康長寿学術研究」は、2002年度の21世紀COEプログラム、並びに07年度のグローバルCOEプログラムに採択され、多くの成果を

挙げています。

その一つが、沢ワサビを使った「薬物と食品の相互作用に関する基礎研究」です。胃がんを誘発する原因の一つにピロリ菌があります。胃の中は酸性が強く、通常の菌はとても生きられません。ところが、ピロリ菌はウレアーゼという酵素を出して、まわりにある尿素を分解してアルカリ性のアンモニアをつくり出し、胃酸を中和することによって生き続けているのです。

ピロリ菌を死滅させるためには、3種類の薬を2週間投与する必要がありますが、薬を飲むと人によっては耐性菌が出現したり、下痢などの副作用が現れることがあります。副作用を減らしながらも、効果を持続させるためにどうすればいいのか。そこで考えたのが、抗菌・抗カビ作用のある沢ワサビの活用です。

クラリスロマイシン(CAM)という薬と沢ワサビの葉から抽出したアリルイソチオシアネート(AITC)という辛み成分を混ぜて、ピロリ菌に感染したマウスに投与しました。その結果、薬の濃度を3分の1に抑えても、同様の効果を得ること

が確認できました。また、ピロリ菌感染マウスの餌に沢ワサビの葉の抽出物を混ぜたり経口投与したりしたときにも、ピロリ菌の増殖が抑制されることがわかりました。

今後は、医師や県の医療機関と連携し、厳重な安全対策を施しながらヒトへの効果を検討していく予定です。

糖尿病の早期発見の研究でも、一定の成果を挙げました。日本では、糖尿病は予備軍を含めて約1870万人いるといわれ、最近の5年間で250万人も増えています。糖尿病は、糖の取りすぎのほか、運動不足や睡眠不足、ストレスからも引き起こされます。そこで早期に病態を把握するための指標を見つけることが研究のねらいです。

具体的には、メイラード反応によって糖尿病患者の血中にどのような酵素が増えるのかを調べました。メイラード反応とは、食品を加熱したときに褐色になったり、香りを放つたりする現象です。40年ほど前、同様のことが生体内でも起こっていることがわかり、特に糖があるほど進行が早くなるため、糖尿病や動脈硬化の

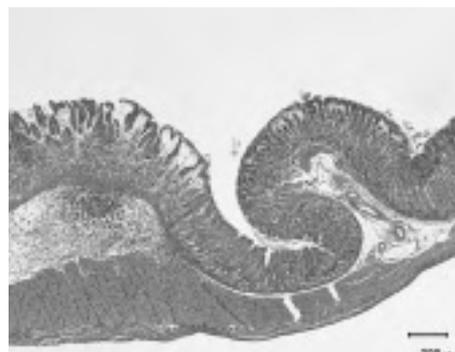


写真1 マウスに抗炎症薬を投与すると、写真のように胃の損傷がみられる。しかし、この状態の胃に植物成分を投与すると、症状が緩和される

研究においても着目されるようになりました。

研究の結果、糖尿病の指標になる酵素をいくつか見つけることができました。今後研究が進み、糖尿病の進行との関係が明確になれば、血液検査で簡単に糖尿病予備軍を検知できるようになり、病気の予防につながるかと考えています。

研究の展望

薬学と食品科学、双方の知識がもっと求められる

薬品と食品の相互作用の解明も、研究テーマの一つです。例えば、狭心症の患者には血液をさらさらにするために抗凝固剤のワルファリンを

投与しますが、納豆などを同時に摂取すると、薬の効果が著しく下がってしまいます。納豆に含まれるビタミンKには血液を凝固させる作用があるため、薬の効果と相殺されてしまうからです。逆に、ビタミンAなどを摂取すると、ワルファリンの効果は増強されます。

今、医薬品と食品の相互作用や安全性について体系的な研究は十分にされていません。今後、医薬品の作用を増強する食品、逆に減少させる食品などの組み合わせを一つずつ解明し、データベース化して世界に発信していく予定です。

超高齢化社会が進み、健康への関心はますます高まっています。それ

自分の興味関心をとことん追究しよう

私は、他人が目を見ない分野を研究してきました。30年前、魚のがんについて研究を始めたときは、周囲から冷ややかな目で見られたものですが、今ではアメリカの大学の医学部でも取り組んでいます。流行を追うのは一見、格好よく見えます。しかし、本当に大切なのは、自分自身が興味を抱いた事柄をとことん追究することです。高校生の皆さんには、普段からさまざまなものに興味を持ち、疑問を感じたらすぐに調べる習慣を身に付けてほしいと思います。自分の好きなもの、したいことが見えてくるのではないのでしょうか。

高校生にお勧め入門書

『健康・老化・寿命～人といのちの文化誌～』
(黒木登志夫著／中央公論新社)

○がん細胞研究の第一人者でもある岐阜大の黒木登志夫・前学長による随筆風の医学解説書。「寿命」「老化」「肥満」「生活習慣」など、9章で構成。医学を身近に感じられるよう、自身のがんや狭心症の体験も語る。

『健康と長寿への挑戦～食品栄養科学からのアプローチ～』

(木苗直秀編著／南山堂)

○静岡県立大食品栄養科学部の創設20周年を記念し出版された研究論文集。お茶やミカン、ワサビなど静岡の特産品を用いた研究からは「食と健康」に挑む研究者の意気込みが垣間見られる。

故、薬学と食品科学の連携は、更に重要になっていくでしょう。また、高次機能性食品の開発や販売についても、薬学と食品科学の両面からのアプローチが必要です。薬局では医薬品だけでなく、健康食品も扱っています。専門知識を持っていない場合もあります。人々が安心して薬局を利用するためには、薬剤師にも食品に対する理解は欠かせなくなっています。

今後、薬品・食品双方の知識や技術、研究の方法論を身に付けた人材は、ますます求められるようになることでしょう。そして、その活躍するフィールドは更に広がっていくものと確信しています。

食生活を楽しみながらの健康維持を支えるために



中村美登里 さん
なかむら・みどり
静岡県立天太大学院
生活健康科学研究科食品衛生学研究室
博士前期課程2年
(静岡県立焼津中央高校出身)

研究のテーマ

胃粘膜への障害を 地産の食品で軽くする

学部時代は島根大生物資源科学部で植物病理学を専攻しました。病気に強い作物を研究していました。私はむしろ、抗菌物質など植物体内で生産されるよい物質が、その植物を食べる人にもよい作用を及ぼすことに興味を抱きました。食品衛生学分野に進んだのは、そうした植物成分を食に生かす研究をしたかったからです。

人間は、生活の中でさまざまなストレスにさらされています。私は主に、ピロリ菌感染や鎮痛剤などの薬物によるストレスから引き起こされる胃粘膜の障害を、ワサビ葉やお茶、ミカンの皮などの抽出物によって軽減できるか否かを、試験管実験や動物実験により、検討しています。

中村さんの1日

- 6:00 **起床** 犬の散歩をした後、朝食をとり自宅から通学
- 9:00 **研究開始** ほかの教室員に比べると、やや早めのスタート
- 12:00 **昼食** 先生方や学生ら10人余りでいただく
- 13:00 **実験** 2、3種類の実験を並行して行う。動物実験で、薬や植物成分を投与したり、採取した臓器からDNAを検出する
- 21:30 **帰宅** 帰宅後に食事
- 24:00 **就寝**

高校生へのメッセージ

したいことを はっきりとさせよう

元タマナティなど海のほにゅう類の保護に取り組みたいと考え、環境分野に進みました。しかし、学部では植物の病気、今は食品を研究しています。食品の面白さに気づいたのは学部で植物病理学に出会い、植物の持つ素晴らしい力を知ったところからです。

将来の夢を描くのは、難しいものです。大切なのは、自分が何をしたいのかをいつでも明確にしておくこと。したいことを追究していけば、きっと自分に合ったテーマにめぐり合えると思います。

研究の難しさ

病理学で学んだ 知識を食に生かす

たものには胃の浮腫を抑える働きが見いだされています。両方を適当な濃度で組み合わせると、出血と浮腫を同時に抑えられることがわかりました。

難しいのは動物実験です。薬によるストレスについて調べるためには、薬以外のストレスが一切かからないようにします。しかし、技術が未熟だと、薬を飲ませる行為自体がマウスにストレスを与えます。一度で手早く薬を投与できるようにするまでは苦労しました。

食品や人体に関する知識を学び直すのも大変でした。食品衛生学には生化学や病理学などの知識が必須ですが、生物資源科学の出身のため、そうした知識はありません。生物は高校3年生



写真2 蛍光顕微鏡での観察風景。マウスから採取した血液や臓器を顕微鏡にかけ、右側のディスプレイに写して確認する

までに習った程度でしたので、足りない知識を洗い出し、改めて勉強しました。

しかし一方で、学部時代から食品や栄養を中心に学んできた人とは異なる角度からアプローチできます。食品成分をケミカル(化学物質)として捉えるだけでなく、環境や農業などの視点も取り入れながら研究を進め、自然と環境との共存や、豊かな食生活を保持しつつ健康増進のためのノウハウを多くの人に提供したいと考えています。

用語解説

- ① **薬食同源**
中国の周の時代に生まれた考え方で、正しい食が健康の維持増進につながるという思想に基づく。
- ② **ピロリ菌**
正式名称はヘリコバクター・ピロリ。螺旋(らせん)状の細菌で、慢性萎縮性胃炎胃かいようや十二指腸かいよう、胃がん等の原因とされる。
- ③ **クワリンスロマイシン**
代表的な「抗生物質」の一つで、肺炎などの治療に用いられ、最近ではピロリ菌除去にも用いられる。
- ④ **糖尿病**
インスリンの作用が低下したために体のエネルギー源であるブドウ糖が細胞に行き渡らず、血液中に溢れている状態。悪化すると、のどが渇く、尿が多くなる、体重が減る、疲れやすいなどの症状が現れる。
- ⑤ **メイラード反応**
たんぱく質やアミノ酸を糖と一緒に加熱すると褐色になる化学反応のこと。生体内でも起こることが明らかにされ、糖尿病との関係が注目されるようになった。
- ⑥ **ビタミンK**
血液を正常に凝固させたり、骨を丈夫に保ったりする働きがある。納豆・クロレラ・モロヘイヤなどに多く含まれている。
- ⑦ **高次機能性食品**
病気予防・健康維持を目的とした健康食品。食品成分が、免疫や分泌、消化などを調節する機能を持っている。

日韓高校生の英語コミュニケーション能力と韓国英語教育の現状

韓国の 高校英語教育の実態

「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」+韓国現地調査より

日韓の高校生の英語力は、リーディング、リスニングにおいて韓国の方が高いレベルにある。こうした結果が、Benesse教育研究開発センターで実施した日韓高校生の比較調査で明らかになった。小学校英語が導入されて12年目を迎え、韓国の英語教育はどのような進歩を遂げているのだろうか。調査の分析結果を踏まえて実施した、韓国での現地調査の様態をレポートする。

図1 英語コミュニケーション能力調査結果

(GTEC for STUDENTS の平均スコアと標準偏差)

	日本 (n=3,700人)		韓国 (n=4,019人)	
	平均スコア (点)	標準偏差	平均スコア (点)	標準偏差
リーディング [320点満点]	153.2	39.7	205.5	53.2
リスニング [320点満点]	163.7	41.4	187.6	49.3

(出典 / Benesse 教育研究開発センター
「東アジア高校英語教育GTEC調査2006報告書」)

英語コミュニケーション能力の高さが際立つ韓国の高校生

ベネッセ教育研究開発センターでは、2006年7月～07年1月、絶対評価スコア制テスト (GTEC for STUDENTS) と質問紙を用いて、日本・韓国の高校英語教育に関する実態調査を行った (「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」(以下GTEC調査2006))。

特徴的な点は、大きく二つ。一つは、英語コミュニケーション能力の差である (図1)。3技能のうち、リーディングとリスニングでは、韓

国の高校生が上回っており、平均スコアで見るとリーディングでは52.3点、リスニングでは23.9点 (いずれも320点満点中) もの差があった。特にリーディングでの差は大きく、韓国の生徒の56.1%が成績上位層であった。

もう一つの特徴は、英語使用経験の差である。図2は学校外の日常生活で英語を使う場面や活動について尋ねた結果だが、韓国の生徒の経験率は、日本の生徒より約30～60ポイント高かった。英語圏への渡航経験がある生徒に現地での英語使用経験を聞いた結果でも、ほとんどの項目で韓国が日本を上回った。

以上の結果を踏まえ、ベネッセ教育研究開発センターでは08年3月、韓国での現地調査を実施した。調査に当たって、定量調査の裏付けとなる要因を探るため、次の仮説を立てて臨んだ。

英語コミュニケーション能力の違いについては、①学校内外における英語学習量の多さ、②大学修学能力試験の影響 (以下、修能試験。日本のセンター試験に当たるが、すべての大学進学希望者が受験するため、

その出題傾向が高校生の英語能力を左右する可能性がある)、③小学校英語導入の影響。

英語使用経験については、それがコミュニケーション能力の向上に結び付いていると考え、次の3点を想定した。④韓国では社会全体で「英語ができなければならぬ」という風潮が強い、⑤ICTの普及によって気軽に英語に触れられる、⑥学校において積極的に英語を使わせる指導が行われている。

なお、今回の現地調査では、小学校(初等学校)1校、高校4校に訪問し、授業観察および生徒・教師インタビューを実施。加えて、KICE(韓国教育課程評価院)に行政レベルでの施策と今後の展望を聞いた。調査には、「GTEC調査2006」の調査企画・分析メンバーである昭和女子大の緑川日出子教授、東京外国語大の長沼君主講師があつた。本コーナーでは高校取材を中心に、以下、

調査の概況を報告する。

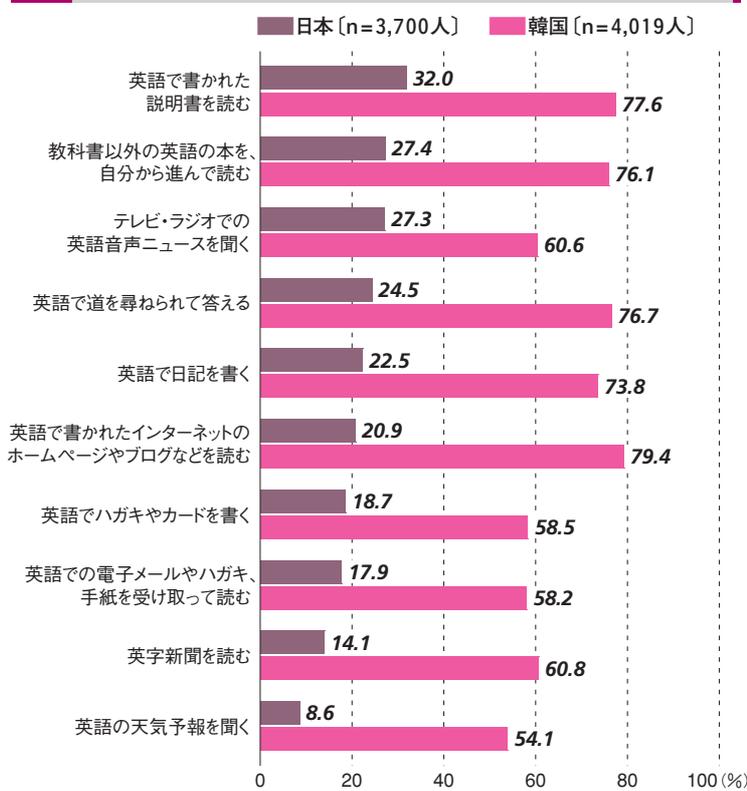
修能試験を意識した授業と圧倒的な量のインプット

今回、訪問したのは、ソウル市内および近郊の高校4校。そのうち3校は私立校だが、韓国の私立校はあ

東アジア高校英語教育GTEC調査2006

調査テーマ	東アジアの2か国(日本・韓国)における高校生の英語コミュニケーション能力と学習習慣や意識、英語使用状況、教師の指導方法の調査から、両国の英語教育の実態を把握し、課題を明らかにする。	
	日本	韓国
調査時期	2006年7月~2007年1月	2006年9月
調査対象	高校1・2年生3,700人 教師65人(学校数10校)	高校1・2年生4,019人 教師43人(学校数5校)
調査方法	1. 英語コミュニケーション能力調査:会場型試験(スコア型英語テストであるGTEC for STUDENTSを用いて、リーディング、リスニング、ライティングの3技能を測定) 2. 生徒アンケート調査:学校通しの質問紙による自記式調査 3. 教師アンケート調査:学校通しの質問紙による自記式調査	
	韓国現地調査	
調査時期	2008年3月	
調査対象	高校2年生20名、教師4名	
調査方法	生徒グループインタビュー、教師インタビュー	
訪問先	ソウル市内および近郊の高校4校、ソウル市内小学校(初等学校)1校、KICE(韓国教育課程評価院)	

図2 日韓高校生の国内での英語使用経験



*韓国では、「学校外の日常生活で英語を使う場面や活動に関する質問」という形で尋ねている。また、日本と韓国で異なるアンケート項目のため、共通する項目のみ集計した。*日本:「(経験が)ない」「無答不明」以外の%。韓国:「(買ったことがない、したことがない、等)」「無答不明」以外の%
(出典/Benesse教育研究開発センター 『東アジア高校英語教育GTEC調査2006報告書』)

くまで私企業などの寄付で建てられた学校で、近隣の地域の子どもたちが通うという点で、日本の公立高校と似ている。また、高校入試がないので、幅広い学力層の生徒が入学してきており、どの学校でも英語・数学については習熟度別授業を実施している。英語の授業はほとんど英語のみで進められ、難しい文法の説明も英語で行うなど、総じて授業のレベルは高い。ペアワークや発表など

生徒の発話の機会が多いが、生徒は物怖じせず積極的に英語を使う。特に、小学校英語が必修化されたあとの生徒には、積極的な生徒が多いという。

各校のインタビューから浮かび上がってきたのは修能試験の影響だ。どの学校でも、修能試験重視の英語教育を行っているとのことだった。一方で、教師の間には、リーディングとリスニングの問題で構成される



ソウル市近郊の高校での英語授業風景。現在、韓国の高校では、試験などの結果評価だけでなく、日常的にどれだけ話したり、聞いたりできるかを評価する「パフォーマンス評価」の導入が進んでいる。簡単なインタビューやポートフォリオを集めて一連の過程を見ることで測るという

修能試験はコミュニケーション能力の向上に直接結び付かない、という認識もある。生徒自身も高校の英語教育は修能試験に対応するためと割り切っており、スピーキングなどは海外留学や学校以外の教育機関を通して学ぶものと考えているようだ。

授業でのインプットの量は日本の高校に比べて圧倒的に多い。特に力を入れているのが、文法と語彙だ。韓国では、小3〜高3の10年間で一貫した英語教育カリキュラムを整備しており、スパイラルに学べるよう工夫されている。進度も速く、中学校段階で日本の高1レベルの文法事

項を学習し終えている。宿題はほとんど課さないが、4校すべてで放課後に自主学習を奨励しており、ほぼすべての生徒が夜11〜12時ごろまで学校に残って勉強するという。

緑川教授は「英語力の決め手は文法力と語彙力。たとえ修能試験のための勉強でも、これだけインプットの量が多ければ、いざ実用英語に取り組んだときの習得は早い。ライティングの弱さもすぐに克服できるだろう」と指摘する。

地域や保護者の教育力が生徒の英語力にも影響

英語の使用経験については、学校

や生徒のレベルによって差があった。韓国ではケーブルテレビやインターネットの普及率が高く、英語専用チャンネルも多いが、それらを英語力向上のために意識して活用している生徒は必ずしも多くはなかった。教師の指導もほとんどなく、インタビューに応じた複数の教師が「中学校における活動量の多さが反映しているのではないか」と指摘する。

意識の高い生徒は、留学先の友だちと英語でチャットをしたり、ときには家族と英語で話したりするという。母親と一緒に英語を勉強しているという家庭もあった。長沼講師は「英語力の高い生徒の周囲には、英

語や教育に高い関心を持っている友だちや保護者が多い。意識の面でも、地域や家庭の影響力は大きい」と指摘する。

4校のみの調査で一般化することはできないが、韓国の高校生は修能試験の影響を強く受けているものの、日常的に英語を使うことに対する抵抗は少ない。圧倒的な量のインプットにより、実用英語にも対応できる潜在的な力を持っている生徒も多いいえそうだ。

詳細な調査結果および分析については、08年11月に報告書としてまとめる予定である。

教育を変えるために必要なこと

ソウル大学校 権 五良 教授
Oryang Kwon



小学校英語がもたらしたもの

韓国の小学校で、英語が正規の教科として導入されたのは1997年のことです。韓国では81年から特別活動の一環として、小学校で英語活動が行われていたため、正式導入のときにも、それほど大きな混乱はありませんでした。

小学校の英語教育は3年生から始まりますが、内容はスピーキングなど音声教育が中心です。教科書もイラストを多用し、音声や映像を使いながら、歌やリズム遊びなど英語を楽しむ活動が中心です。

小学校英語の必修化は、中高における英語教育にも変化をもたらしました。中学で音声言語やコミュニケーション能力を重視する授業が行われるようになり、その分、文法の指導は減りました。語彙の面では、小3〜6年生の間に計500語を習得させることになっています。高校卒業までに覚えなければならない単語数は変わっていないため、中高の指導内容が充実しました。

社会全体が英語の重要性を認識

教育を変えるためには、教育課程、教科書、教員養成システム、入試、指導方法のどれか1つを変えるだけでは意味がありません。すべてが連携して、同時に変わっていくことが大切です。

韓国ではまず、教育課程を変えました。これにより教科書が変わり、教員養成システムも変化しました。今は入試も変わっています。かつて、韓国の入試では文法が中心でした。しかし、93年に修能試験が導入されてからは、発音やアクセントを筆記試験で問う問題は姿を消し、主題や筆者の感情、態度などを読み取る試験内容に変わっています。また、リスニングが導入されたことで、ここ数年、高校生のリスニング力は大きく向上しています。現在は50問中17問が充てられていますが、将来は25問まで増やす予定です。

入試の変化に応じて、高校の指導にも変化が表れています。高校教師のアンケートによると、3分の2くらいの教師が修能試験の変化に応じて、教え方やテストの方法を変えていると答えています。

社会全体の認識も大きく変わりました。早期留学や語学研修を受ける学生が増え、大企業の入社試験では、スピーキングテストが課されるようになりました。教育政策だけではなく、社会全体で英語が大切であるという認識を共有していることも、教育を変える大きな原動力であり、それが今日の韓国の英語教育を支えているのです。

現場で学ぶ 瞬間の判断力と創意工夫

視覚障害者の歩行指導を通して社会参加する

高校を出て間もない若者が、真剣な表情で犬の訓練に取り組む。犬舎の清掃、排便の世話もする。盲導犬を「目」として、視覚障害者の社会参加を支援するアイメイト協会では日常の風景だ。「犬が好き」なだけではできない仕事だが、盲導犬による視覚障害者の歩行指導員を目指す者にとって、ここは仕事を通して自らが社会参加する場でもある。

見習期間中に「観察する目」を養う

夕方5時近く、1日の歩行指導が終わる。盲導犬を使った視覚障害者の歩行指導では、ときに1日10kmも歩くことがある。休む間もなく今度は盲導犬の食事の時間だ。「アイメイト協会」の建物の2階、視覚障害者が歩行指導を受ける4週間の間、指導員と共に寝泊りする宿舎。指導員は視覚障害者に犬への食事の与え方も指導する。

これからの長い時間、文字通り寝食を共にする視覚障害者と盲導犬の間に、「目の仲間」としての信頼が育まれる時でもある。歩行指導員の仕事に就いて35年、中野薫さんが、犬の扱いに不慣れな視覚障害者に助言する声が静かに流れる。人と犬の信頼関係がスムーズにいくようにに図ることは、指導員にとって重要な仕事だ。その様子、見習生の1人がじっと見守る。



盲人更生援護施設
(財)アイメイト協会

Profile

1948年、塩屋賢一会長が盲導犬育成を志し、試行錯誤で始め、57年には国産初の盲導犬「チャンピ」を誕生させた。71年には東京盲導犬協会を設立し、89年、アイメイト協会と名称を改定。これまでのほぼ50年間に、1000頭以上の盲導犬アイメイトを育成。アイメイトを「目」として自立した視覚障害者は1000人を超える。現在、年間40～45頭のアイメイトを育てる。

盲導犬

◎盲導犬の歴史は古く、紀元前79年、火山の噴火で埋もれたポンペイの発掘品に、犬に引かれて歩く盲目の音楽師の姿などが描かれた遺物が見つかっている。日本では、1939年、4人の実業家が、ドイツから盲導犬を1頭ずつ輸入、陸軍に献納したのが最初とされる。本格的に盲導犬の育成が始まるのは、戦後になってからである。国内の視覚障害者の数は厚生労働省統計で約38万2700人とされる(2004年)。

現在、「アイメイト協会」の職員は、歩行指導員6人、研修生6人、他に事務局が4人の計16人である。一人前の歩行指導員になるためには、3年の見習期間と2年間の研修を経験することの間、見習生にとっては「観察する目」を養うことが大切になる。

盲導犬による歩行指導の現場では、予期しないことが起きる。そのどれもマニュアルで対応できる問題ではない。中野さんが、こう説明する。

「大事なものは瞬時の判断と創意工夫です。盲導犬が視覚障害者を正確に誘導しないときにどうしたらいいか? それは状況によって皆違います。その場で自分で考え、適切な解決法を見つけて、指導しないとイケない。歩行指導員に求められるのは、その時々々の判断力です」

そのときのために普段から視覚障害者と盲導犬の動き、先輩指導員の反応を観察することが重要になる。「どんな小さな動きも見逃さないことが大切です」と中野さんはいう。

現場で学ぶ
瞬間の判断力と創意工夫
視覚障害者の歩行指導を通して
社会参加する

見習生にアイメイトの訓練を指導する中野さん



路上で歩行指導を受ける4週間、視覚障害者はざっと130kmほどの距離を歩く。その間、さまざまな状況に応じて盲導犬との呼吸を合わせていくが、それには見習生も付き従うことが多い。視覚障害者にとっても、見習生にとってもかなりのハードワークだ。

ある見習生が、協会の機関誌にこう書いている。「自身の未熟さを思い知らされ、いい経験をしている。鍛練を積み、訓練・指導を学ぶことで、様々な出会いを経験し、自分を成長させていきたい」

本当に視覚障害者の自立を支援しようと思ったら、視覚障害者と1対1の人間として向き合う場面も出てく

る。しかも多くの場合、視覚障害者は歩行指導員よりも年齢が高く、人生経験を積んでいる。日常生活を含めて、そういう人を指導するということは、指導する側の人間性が問われることを意味する。「そのためにも自らを磨かないといけない」と、若い見習生はいう。

「主体は人間である」という 基本理念

現在、日本には盲導犬に関係する団体が9団体ある。歴史的には「アイメイト協会」が最も古く、協会がこれまでに育ててきた盲導犬は、1000頭を超える。「アイメイト」とは、アイメイト協会で育成された盲導犬に対する協会独自の呼び方で、「私の愛する目の仲間」を意味する。

協会にとって重要課題の一つは、歩行指導員の養成である。指導員の仕事は、大きく二つある。盲導犬の候補犬ラブラドル・レトリバーに基礎訓練、誘導訓練を施し、「アイメイト」に育て上げること。そして、視覚障害者に「アイメイト」を使って歩行する技術を指導することだ。

塩屋隆男理事長は、歩行指導員を目指す見習生に常にかう話しかけているという。「ここでは犬の訓練もしています。しかし、メインの仕事はその先にある。『自分で歩く』という視覚障害者の意欲をバックアップすることです。人との付き合いが苦手なので、好きな犬の世話をしたいという人もいますが、この仕事ほど人と濃密に向き合う仕事はない。まずそれを理解しないと、歩行指導員は務まりません」

協会の建物には、点字ブロックや点字プレートなど視覚障害者の歩行を手助けする設備が一切ない。ここには

「アイメイト協会」の理念が込められている。

「視力はなくても、自分でできることは自分で。人の助けを受ける立場からむしろ『与える立場』に変わることが大事です。視覚障害者が、依頼心を捨てて、主独立の精神で社会参加する気持ちが大切であり、私たちがそのお手伝いをしているのです」と、塩屋理事長はいう。

点字ブロックや点字プレートが必要な場所もある。だが、それ以外のところでは、そうした設備に頼らなくても、視覚障害者が盲導犬といっしょにどこでも自由に外出できるようにする。「アイメイト」を連れている時、晴眼者の手を借りず、白杖も使わないのは、「自分で歩く」という視覚障害者の意思を大事にしているからだ。

「主体は人間」の考え方は、歩行指導員の養成にも反映される。「盲人にできないことにだけ手を貸す」との方針で、視覚障害者が普通の人と同じ生活が送れるように助言をすることを要求するのだ。それは歩行姿勢から言葉遣い、ナイフやフォークの使い方、食事の仕方など日常生活の態度にまで及ぶ。指導する側も視覚障害者と「1人の自立した人間」として対応するのである。

現在、研修生は6人。全員女性で、皆20歳から22、23歳と若く、大学を出てこの仕事を選んだ者もいる。視覚障害者の自立を支援するために、若者に求められるハードルは極めて高い。

「自ら体験し、考え、学ぶ」が成長の鍵

見習期間の3年間は、毎年の大よそのカリキュラムが決まっており、犬の飼育、管理、衛生、生態から始まり、犬の心理や繁殖、血統、遺伝、あるいは獣医学の初

歩的な知識を学んでいく。

こうした犬に関する知識の習得と並行して、点字や社会福祉、盲人の心理、目の構造・疾病などに関する基礎も勉強する必要がある。とはいえ、教室で教えてもらうのではなく、あくまでも実践主義で、「自ら体験し、考え、学ぶ」が基本だ。見習生になって2か月もすると、犬を訓練する仕事も始まる。最初は親切に教えてもらっても、後は自分で考えてやることになる。

見習生の1日の仕事を見ると、朝8時に全体のミーティングがあり、続いて全員で犬舎の清掃、犬の排便、ブラッシング、飼料づくりなどの雑用をこなす。犬舎には70頭ほどの犬がおり、この作業を手際よく進めなければならぬ。

2年目に入ると、自分が担当する犬の訓練に取り組む。特に前方に障害物がある場合や、頭上に何か飛び出しているものがあるときなど、視覚障害者がぶつからないよう回避して通る訓練をする必要がある。経験が浅いと試行錯誤を繰り返す。

見習生が視覚障害者の歩行指導に少しずつ関わるようになるのは、3年目に入ったころからである。前出の見習生のように、先輩指導員が歩行指導をしているのを観察することから入り、徐々に指導役を譲られていく。研修生になると、自分で歩行指導を担当するなど視覚障害者との関わりは深くなる。

歩行指導員に求められる資質について、塩屋理事長はこう話す。「相手の気持ちを理解し、その立場に立てるかどうかがです。その人の気持ちになるということは、決して同情することではありません。人間としての幅が非常に重要になります」

見習生・研修生には、人前で「話す場」を設けて、自

分の考えを発表させることもある。指導員にとって、自分の考えを目の見えない相手に正確に伝えることが不可欠なこともあるが、話すことでその人の人柄が分かるからである。

視覚障害者が自立するプロセスに関われる喜び

5年間の見習いと研修を経て、協会の理事が「合格」の承認を出すと初めて歩行指導員になることができるが、仕事のハードさに、途中で辞める見習生もいる。だが、それでも指導員になりたくて頑張る若者がいる。定期的に募集するわけではないが、応募者も募集人員の5〜6倍は来る。「そこに他にない魅力があるからではないですか」と塩屋理事長はいう。

「歩行指導で常に行動を共にしていると、視覚障害者に精神的な変化が生じてくるときがあります。『アイメイト』によって主体的に生きていける喜びから、人生観や生き方が変わってくるのです。指導員はそのプロセスに関わっている。若い人にとっても、それは嬉しいと思います」

あるとき、ようやく「アイメイト」の訓練に携われるようになった見習生が、やはり機関誌にこう感想を書いた。「使用者が『アイメイト』と共に旅立っていく姿を見ると、この仕事は犬の訓練ではなく、使用者一人ひとりの人生を豊かにすることだと感じる」

この見習生も「犬が好き」というのが、この道を選んだもともとの動機である。それが見習生になって1年余り、自分の使命の重さを自覚するようになった。歩行指導員という仕事は、視覚障害者の人生に深く関わることで、指導員自身が社会と向き合っているのである。

今月のテーマ

2年生夏休み明けの意識付け

指導の重要性

2年生の夏休み明けは、高校生活の折り返し地点である。学習、進路の両面で、生徒の意識を一段上へと高めることが求められる。だが、この時期は日々の生活に明確な目標を設定しにくく、生徒は中だるみになりがち

だ。そこで集団の意識を底上げするために、いわゆる中間層に位置する生徒への働きかけに注目してみたい。生徒気質の二極化が指摘される昨今、中間層からクラスを大きく変える指導の在り方を考える。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです。

目標 1 中間層に注目して実態を把握する

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より



① 夏休み後のアンケート（5段階評価）

部活動への取り組み方はどうでしたか？	できた	まあできた	どちらでもない	あまりできていない	できていない
夏休みの課題への取り組み方はどうでしたか？	できた	まあできた	どちらでもない	あまりできていない	できていない
課題以外の自主学習の取り組み方はどうでしたか？	できた	まあできた	どちらでもない	あまりできていない	できていない
規則正しい生活はできましたか？	できた	まあできた	どちらでもない	あまりできていない	できていない
進路について考えましたか？	できた	まあできた	どちらでもない	あまりできていない	できていない
夏休みならではの経験、夏休みだからできる取り組みができましたか？	できた	まあできた	どちらでもない	あまりできていない	できていない
家の手伝いをしましたか？	できた	まあできた	どちらでもない	あまりできていない	できていない
夏休み後の目標、計画は明確にできましたか？	できた	まあできた	どちらでもない	あまりできていない	できていない

9月からの目標・計画を書こう
(悩みや不安があれば自由に書いてみよう)

ポイント

■中間層の生徒に目を向ける

変化の大きかった生徒に指導の意識がいきがちだが、あまり変化がなかったり、部活動も勉強もそこそこで、部活動も勉強もあまり成果が出ていない、元気がないという中間層の生徒の指導こそ重視したい

<中間層の生徒の具体例>

- ・質問項目の5段階で、多くの項目が「どちらでもない」生徒や、夏休みならではの体験がない生徒、目標や計画が明確でない生徒
- ・部活動に一生懸命取り組んだが、疲れている生徒
- ・部活動に一生懸命取り組んだが、勉強面には手が付けられていない生徒
- ・部活動に参加しているが、勉強と両立できずに悩んでいる生徒
- ・学習に取り組んでいるが、成果が出ずに不安を感じている生徒・・・など

※変化の大きい生徒には注意

夏休み前の印象と大きく違う回答をしている生徒（回答内容が悪くなっている生徒はもちろん、よくなっている生徒も）にしっかりと声をかけることが重要

データ作成・加工の POINT 夏休みをどのように過ごしたかで、秋以降の生徒の成長は大きく異なる。まずは生徒がどのような日々を過ごしたかを把握したい。部活動などに熱中して充実した生徒や逆に生活習慣が乱れてしまった生徒などは比較的把握しや

すく、指導も迅速に行われる。だが、今後クラスの雰囲気をつくっていくのは、ややもすると指導が後手に回りがちな「中間層」である。中間層を上位層や下位層同様に明確な指導の対象として意識したい。①のアンケートや2007年9月号本コーナーのチェックリストなどを活用して生徒把握をしたい。

プラスαの一工夫

互いの変化に戸惑う生徒を支える

この時期には①のアンケートに加えて、面談や「スタディーサポート」などを通して、生徒の状況を把握することが非常に重要である。夏休み明けの生徒の気持ちは実に多様であるが、生徒自身、クラスメイトを見て「みんな少し変わったな」と感じている。クラス環境の変化に戸惑う生徒を支える意味でも、面談などを通してこれまでと変わらない教師のスタンスを示すことは大切だ。

夏休みの経験や思いを共有する

夏休みに印象に残った出来事や今後の目標などを生徒に発表させたり、オープンキャンパスに行った生徒の報告書を廊下に貼り出したなど、生徒の夏休みの経験、成果を共有する場を持つことも生徒の意識を高めるのに効果的だ。

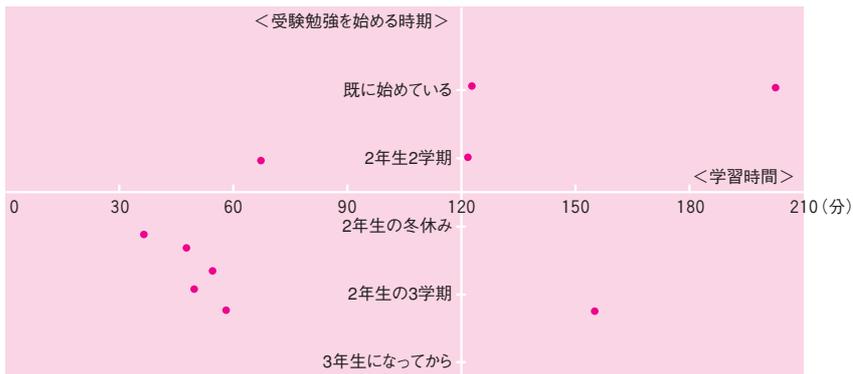
『VIEW21』編集部ヒアリング結果より



②先輩のこの時期の学習時間と過ごし方のポイント

	2年生 夏休み明けの 学習時間	3年生 夏休み明けの 学習時間	合格大	この時期のポイント
Aさん	1時間	5時間	●●大	2年生のこの時期は、部活動でも中心になるため、勉強時間が取りにくいと思います。ただ、そういった中で、隙間時間であっても継続的に学習する習慣を身に付けることができれば、受験生になってからが楽になります。現に私は、部活が終了したあとは、スムーズに受験勉強に専念することができました。
Bさん	2時間	4時間	▲▲大	夏休みが終わって、何となくだるかったのを覚えています。自分で計画を立てて勉強することはできませんでしたが、少なくとも学校の授業には集中しようと意識しました。だから日々の勉強は、学校の課題と、予習、復習のみでした。でも、その習慣が3年生になったときに生きたと思います。
Cさん	30分	2時間	浪人	夏休み明けは、部活動や学校行事で、ほとんど勉強していませんでした。学校の課題もやったりやらなかったり…。振り返ると、この時期に学習習慣を身に付けておくことが大切だったと思います。何を勉強すればよいかわからない人は、先生に相談しましょう。思っている以上に、2年生で大きな差をつけられました。

③「学習時間」と「受験勉強を始める時期」の4象限のプロットグラフ



データ作成・加工の POINT

夏休み中に生活習慣が乱れた生徒には、早期に指導を行いたい。その際、②のように、2年生の夏休みの過ごし方がうまくいった先輩、うまくいかなかった先輩、休み明けに遅れを取り戻した先輩などを紹介する。中間層に位

置する生徒にも、その生徒が思い当たる状況と似た先輩例を提示し、極端なケースに偏らないようにしたい。また、9月、10月は学校行事などで授業が休みとなることが多いので、その分、家庭学習をしっかり行うことが重要であると生徒に伝えたい。そこで、③のように学習時間と、受験勉強を始める

時期を調査し、全体分布を発表することで、危機意識を持たせる。「本格的な勉強は3年生になってからでよいと思ってたけど、既に受験を意識している人がいるんだ」「勉強しているつもりだけでもっと勉強している人がたくさんいるんだ!」など意識付けができるだろう。

プラスαの一工夫

学習時間、生活状況と成績の相関を理解させる

成績の上昇・下降は、生徒自身の努力や1日の過ごし方と強く結び付いていることを、この時期に改めて伝えることは重要だ。1日の学習時間や3点固定(起床・学習開始・就寝時間)の徹底度と現時点の成績の相関を、「スタディレポート」や学校独自の学習状況調査で生徒に提示する。生徒に、日々の生活の大切さを改めて理解させたい。

1日を見直させる生活記録表で

この時期、部活動の中心的存在になり、学習時間が確保しにくくなっている生徒も多い。そこで、部活動の時間なども含めた1日の生活記録を付けさせることで、30分、1時間という短い時間でも、工夫次第で学習時間は確保できることを実感させる。同時に、先輩の事例などを挙げる。忙しい中で短時間でも学習を継続することができて初めて、部活動引退後に、部活動にあててきた時間を学習の時間へとスムーズに移行できることを伝えたい。



目標 3 学習方法を提示し、具体的な行動に結び付ける

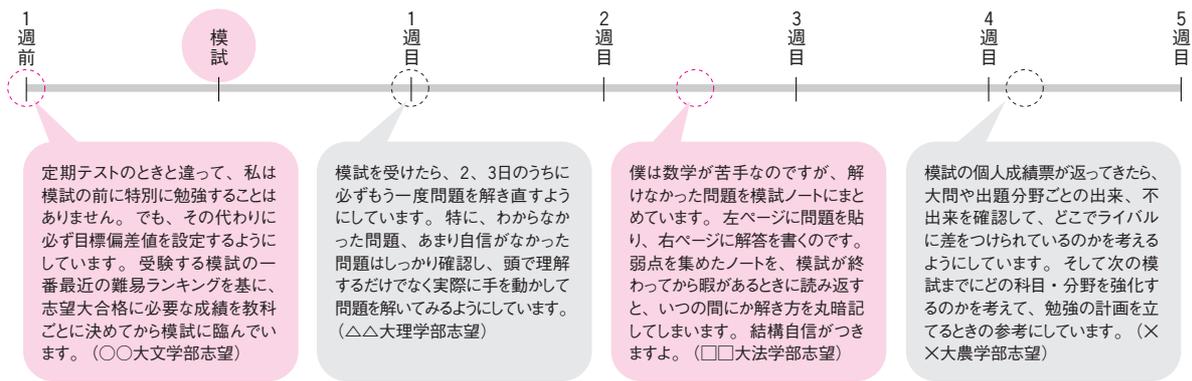
『VIEW21』編集部ヒアリング結果より



4 模試の成績推移と振り返り・今後に向けて

	1年生7月 SS	1年生11月 SS	1年生1月 SS	2年生7月 SS	模試の振り返り、今後に向けて
Aさん	43	45	50	51	1年生の初めての模試では、正直焦ったが、先生に相談して何をすべきかを教えてもらった。「模試は復習こそ重要」ということがわかったので、模試ノートを作成し、間違えた部分はいつも繰り返し学習していた。ようやく偏差値も50を超えることができたので、今後この調子で伸ばしていきたい!
Bさん	49	52	53	55	着実に成績を伸ばしてこられたのは、苦手な数学で何とか基礎的な問題を解けるようになったからだ。先生に基本問題のプリントをつくってもらい、毎日解いていた成果が出たと思っている。やはり日々継続していくことが力になると感じている。部活動で忙しいが、これからも時間をつくって毎日継続させていきたい。
Cさん	60	62	63	62	国数英の3教科総合の偏差値では、安定した結果を出しているが、それは英語の成績が良いからで、実は苦手な数学が足を引っ張っている。今後数学を何とかしていきたいと思っている。これからの模試は、理科、地歴も入って教科数が多くなるので、優先順位をつけて学習していきたい。

5 模試を活用した学習の流れ (先輩の体験より)



データ作成・加工の POINT 中間層の生徒には、毎日勉強しているのになかなか成果が出ないという者も多い。その場合、具体的にどのような学習をすればよいかわかっていないこともある。まず、予習・授業・復習の流れが基本ということを改めて徹底させたい。

多くの場合、勉強の仕方は入学時に説明しているが、この時期に再度徹底を図ることは非常に有効だ。勉強の仕方だけでなく、「この時期までに、この範囲の問題を2回繰り返そう」など具体的な勉強目標を教科別に提示してもよいだろう。模試を受けっ放しになっている生徒には、4のような振り返りに取

り組ませ、模試活用への意識付けを行いたい。また、5を見せることで、模試は受けさえすればよいものではなく、数週間～数か月の学習の流れをつくるものであることを理解させたい。

プラスαの一工夫

学習の仕方をまとめさせ生徒と確認する

生徒に、国・数・英の3教科について、それぞれの自分の学習方法をまとめさせ、面談などで確認する。「本当にこの勉強方法でいいのか?」と不安に思っている生徒には、自分の学習方法を確認する機会になるだろう。担任が面談で指導するのではなく、クラスの中で教科担当の生徒を指名し、その生徒を中心に互いに勉強の仕方をチェックさせ合うこともできる。クラスメイトのさまざまな勉強法を知ることで、学習への取り組み方を見直すことができる。

普段の予習・授業・復習が受験勉強であることを伝える

受験勉強に対する関心を持ち始める生徒も出てくる時期だが、生徒は、受験勉強とは難しい問題集を解くなど、特別な学習をしなればならないと思っていることも多い。日ごろの予習・授業・復習をしつかりすること、普段の授業が受験につながっているということを意識付けたい。志望大に合格した先輩の2年生のときの様子などを具体的に伝えることで、生徒の理解は深まるだろう。

ウェブサイトから ダウンロード!

Benesse® 教育研究開発センター
<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの見せ方 **検索** クリック!

HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください。

加工可能な資料が ダウンロードできます!

このコーナーで紹介してきた図版や関連する図版は、加工可能な形でウェブサイトにアップする予定です。

学校の実態に合わせてご活用ください。

● 夏休み後のアンケート

● 進路希望調査

…などです!

人気の
ダウンロード
データ例



学習の記録 (生活時間帯併記型)

生徒に自らの学習状況を客観的に把握させ、具体的な改善点や安心材料を指摘するためのツール。起床・帰宅・学習開始・就寝の時間を固定させ、生活のリズムを整えさせてください。



先輩が進路を決めた理由 (部分)

面談などの場で生徒に提示すれば、先輩の進路決定の道のりを見ながら、「では、自分はどうやって決めていくのか」を模索するきっかけとなるツールです。

目標 4 進路を具体的に考えさせる

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

6 進路希望調査

志望大・学部・学科名

月 日

大学	学部	学科(コース・専攻)
----	----	------------

■この大学に進学して学びたい内容

■この大学を卒業して就きたい職業・取りたい資格

■サークル、留学などキャンパスライフの魅力

■入学後の生活の様子(当てはまるものに○)

一人暮らし	OR	自宅通学
アルバイトをする	OR	アルバイトはしない
奨学金を利用する	OR	奨学金は利用しない

■入試科目・配点 ※国公立大は上段にセンター試験、下段に個別学力試験を記入

国語	数学	英語	理科	地歴 公民
----	----	----	----	----------

■合格のための11月模試の目標

以上、現時点での希望の内容に
間違いありません

本人署名 年 組 名前

保護者サイン	担任サイン	進路指導部長サイン
--------	-------	-----------

データ作成・加工の POINT

進路について考えることで学習意欲の向上や生活習慣の見直しができる。夏休み明けに進路希望調査を実施している学校も多いが、志望校を記入させるだけではなく、生徒の気持ちを締め、秋からの決意につながるもの

にしたい。6 のように、大学で学びたい内容や卒業後の進路、入試科目・配点を記入する欄を設けることで、「十分に考えて掲げた目標」として、志望大を理解することができる。保護者や担任以外の教師の確認欄を設けて、自分の決意が他者にも認知されたものであることを意識させてもよい。

プラスαの一工夫

志望理由書の実物を
生徒に見せる

今後、進路についてどのくらい深く考える必要があるのか、生徒に実感させるために、卒業生の書いた志望理由書を生徒に見せる。目標到達レベルを提示することで、生徒の意識を向上させることができる。

保護者の声も活用し
クラスの一体感を醸成

生徒はもちろん保護者も含めたクラスの一体感の醸成は非常に重要である。例えば保護者に「自分の学生時代を踏まえての子どもへのアドバイス」を書いてもらい、それを学級通信などに掲載する。生徒にとっては、教師や自分の家族以外の大人の考えに触れる機会になるだけでなく、保護者同士がお互いを知るきっかけになり、クラスの一体感の醸成に貢献できる。



「自立」を促す働きかけの大切さ

我々教師の目的は「自立した高校生」を育てることである。そのためにどのような指導をし、どのような援助をするのか、その答えを見つめるために日々頑張っているといえる。何もしなければ「自立」は生まれぬと思う。逆説的だが「自立」させるための働きかけ、声かけが大切なのだと考える。

〔岡山県立邑久高校・杉山義則〕

子どもの変化に「対峙する取り組みを模索

ここ10年で生徒の質は大きく変わったと思う。校内暴力や授業崩壊など、目に見える形で生徒のリアクションは激減したのではないだろうか。むしろ、無気力・無関心といった傾向が強いのと思う。他人とかかわれない生徒。自分の夢や目標を抱けない生徒。6月号の特集にはさまざまな要因が挙げられていたが、学校現場としては、授業や部活動などの課外活動を通じて、もっと積極的に生徒にかかわっていくことが、より一層必要になってきていると、非常に強く感じている。

〔北海道弟子屈高校・阿部保志〕

指導に必要なものは組織力

6月号の「指導変革の軌跡」に取り上げられていた3校に共通しているのは、指導には組織力が重要ということである。個人で指導にあたるよりも、指導力に少しくらい差があっても団結して指導にあたると、思わぬ効果を上げるのだと、あらためて気づかされた。今一度組織をまとめてチャレンジしてみようと思う。

〔福岡県立小倉東高校・上森哲生〕

VIEW'S SQUARE

Volume 3

読者のページ

教育最前線からのホットな話題を紹介します

一体感で打開、ノウハウ継承の難しさ

「指導変革の軌跡」のコーナーで「以前に特集された高校のその後」を取材されているのが、とてもよいと思う。系統的な指導が確立されたあとに、いかにノウハウを継承していくのか……。立ち上げよりも、継承の方がはるかに難しいのは……と痛感している昨今、6月号の川越高校の事例は大変参考になった。猶興館高校の、校内がまとまって取り組みを進めている点に刺激を受け、元気をいただくと同時に、少しうらやましく思った。「校内の一体感」こそが取り組み継承の原動力になるのであって、一個人の力に頼っているうちはまだまだだと感じた。

〔滋賀県・匿名希望〕

3年間を見通したデータ提示の必要性

「生きたデータの見せ方・つくり方」は、毎回とても参考になっている。特にPTA総会などの時期が来たときには、バックナンバーを引っ張り出して利用している。今後は時期的なものだけでなく、3年間を見据えた保護者の引き付け方やポイントなども指摘していただければと思う。学校の立場では考えもなかった視点で、我々の視野を広げていただければと思う。

〔秋田県立能代高校・藤原孝一〕

教師川柳

文化祭 主役は生徒と 言い聞かせ

兵庫県・匿名希望

「VIEW21」へのご意見・ご感想を Benesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

- ① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。
- ② 画面右端の『VIEW 21』の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。
- ③ 入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

小誌に対してお寄せいただいた「全国の読者の声」がウェブサイトでご覧いただけます。

<http://benesse.jp/berd/>



編集後記

「高校生の自立」をテーマに2号連続で特集しましたが、いかがでしたでしょうか。6月号の実態編に対して、先生方から多くの反響をいただきました。「実感通りで共感できた」「生徒を自立させるための方法を知りたい」「生徒の自立というけれど、教師の方はどうなのだろうか」などさまざまです。先生方の声をいただきながら、今後もより役立つ情報をお届けしていきたいと思えます。今号に対して是非、ご意見・ご感想をお寄せください。（松平）

VIEW21 9月号 Vol.3

2008年8月27日発行

発行人 新井健一
 編集人 原茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
 印刷製本 大日本印刷(株)
 編集協力 (有)ペンダコ
 撮影 川上一生、小高和美、ヤマグチイキ

◎お問い合わせ先
 VIEW21編集部
 〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー22階
 電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2008

VIEW21

2008
October
10月
Volume 4

次号は
10月22日発行(予定)
【VIEW21】高校版は
年6回の発行です